



舟中記

特別
イ 4
3159
A 1



馬中目次

潮来り
土の形
呉たう浦
藍の山
家出

山姥
仙境
除おの
東海を
離る

雪が...
...
...
...
...



舟中物語

漆山天童

潮来行

都	青	り	に	く	し	五	潮	漆
馬	簾	北	蔭	紫	天	月	来	山
れ	に	利	蒲	陽	も	雨	行	天
た	夕	根	咲	花	晴	の		童
る	日	川	く	の	れ	降		
二	を	の	と	宿	、	り		
人	除	河	そ	を	青	続		
の	け	岸	謡	水	嵐	き		
客	て	に	は	鶏	の	て		
あ	、	沿	る	の	叩	富		
り	水	ふ	、	の	く	士		
	に	牛	潮	の	お	も		
	向	蟻	来	叩	ろ	湖		
	へ	な	の	く	、	に		
	る	る	手	初	真	や		
	二	割	前	蟬	菰	度		
	階	烹	一	の	の	る		
	座	店	里	聲	聲	べ		
	敷	の	ば	珍	珍	か		
	に		か	ら	ら	り		
				し	し			

綱目中目次

潮来り
土の形
呉たう浦
藍の山
家出
古平七郎
依別松
ひ、立
皇花

山姥
仙境
陰紅知紅院
東海寺
離家
臨所
渡島法
真主物屋
遊遊

を笑い轟然と、其の文に
雪あしらく、釵かざやくハ
才の文より、仙葩は、浮ら
て来り梵鐘、雪のつて滅
す、がめさハ、韻も、て、後、の
文より、舟中物語一篇
又才あり、又情あり、とら、も
あす、も、是、韻、も、つ、て、勝、る
の、文、より、甚、だ、促、し

を笑い轟然とハ情の文し
雪のうららかに匂かざやくハ
才の文うら 仙葩はみ浮ら
てまら 梵鐘 雪のうらつて滅
すばめさハ 韻もつて後の
文うら かつ物語一篇
又才あり又情ありとらこも
あすまは是 韻もつて勝る
の文うら 甚だ促し

邂逅一章 神話のあ
る其をさ 畫がいてあつて
英雷のあを 換すも 似
り蛇足ま けりし
あしまの 促し けりし
あしまの 促し けりし
あしまの 促し けりし
あしまの 促し けりし

家体要祢

會あつたんだもの吞のまなひでサ、大おほいに吞のむべ
 し、大おほいに吞のむと言いつても、僕ぼくは病人びやうじん、君きみは
 下戸げこと来て居をるから代かりめの鉦てうし子こは一合いちがうが
 関せきの山やまか、情なさけないわけのもんだ
 と言いつて、ネルの單物ひとへに縮ちぢ緋へ兵へい子こ、紺足袋こんたごひ、
 色いろ白しろの真嶋健三まじまけんざうは、頬ほのあたり更さらに紅くれないを帯をび
 て突つと立たちーが、簾たなに日蔭ひかげとなれる椽側えんがはに再また
 び座ざを占しめ、後ごぞ椽えんの手摺てすりに片臂かひぢを凭もたせ、
 陶然とうぜんとて天晴てんせいき、
 君きみに勸すすむ更さらに一杯いっぱいの酒さけを盡つくせ、西陽関せいやうかんを出い

オイ潮田うしほの、先まア此景色このけしきでも見給みたまへ、大層憂たはげ
 鬱ふさ込んで居をるではなにか、何様どようかしたのか
 今日けふは少すこし風かぜがあつたから船ふねに酔よつたん
 だらう、静しづかにして居をれバ直ただぐ癒なほる、直ただぐ癒なほ
 るといへば僕ぼくの不ふ治ぢの病やまひには困こまつて仕舞しまふ
 然しかし先生せんせいも一ひと方かたなうず心こゝろ配はいして呉くれるの
 で此頃このころは余程宜よつほどいやだが、醫師いしやが略かっけつ血けつに
 善よくなひといふので、其後そのごサツパリと止やめ
 て居をつた所ところ為なるか、今日けふは僅わず少かばかりの酒さけで
 馬鹿ばかに酔よつて仕舞しまつた、然しかし久ひさ惱しで親友しんゆうに
 馬鹿ばかに酔よつて仕舞しまつた、然しかし久ひさ惱しで親友しんゆうに

廿

徐じゆにに

既すでにに政かにへんじてと飛とびさりしともおもはるゝゝ盃さかづ
 をひ引ひいてく會あひあひあつた席せき膳ぜんの上うへになみなみな波なみもたたたせす、ほうほう子しはは
 こい言いはれて、潮うしほ田た保たもつはあ首かぶをあ擧あげ、先さ刻ときからり、満まん
 不用いらいん事ことはない、少すくしも顔かほ色いろもある、悪わるいやうだ、
 否いや、何なんにも不いらいん用よう、
 にか買かはせせやうか、
 が、僕ぼくはなんにも不も持も持もしと、清きよ心こころ丹たんでも女め中ちゆう
 満まん村むら先せん生せいもま居まるのに、寶ほう丹たんでもあれば、宜よろしい
 迎むかへなご、東あづて、大おほ失し敗くだ、直すぐ、潮うしほ来きたに着けは
 だて嘔え吐き氣けでもするのか、下へ手たに此こう處ところまで出で
 迎むかへなご、東あづて、大おほ失し敗くだ、直すぐ、潮うしほ来きたに着けは
 満まん村むら先せん生せいもま居まるのに、寶ほう丹たんでもあれば、宜よろしい
 が、僕ぼくはなんにも不も持も持もしと、清きよ心こころ丹たんでも女め中ちゆう
 にか買かはせせやうか、
 否いや、何なんにも不いらいん用よう、
 不用いらいん事ことはない、少すくしも顔かほ色いろもある、悪わるいやうだ、
 こい言いはれて、潮うしほ田た保たもつはあ首かぶをあ擧あげ、先さ刻ときからり、満まん
 をひ引ひいてく會あひあひあつた席せき膳ぜんの上うへになみなみな波なみもたたたせす、ほうほう子しはは
 既すでにに政かにへんじてと飛とびさりしともおもはるゝゝ盃さかづ

づづれれば故こう人じんななかかららん、
 餘よ音おん嬾まここしして、北きた利り根ねに薄うすみみ舟ふね人ひとの一いっ齊せき
 振う向むくまて、聲こゑ朗らうかに吟ぎんどりり、が、今いまこの久きう
 瀾らんの情じょうを慰なぐすべく、盛もられたる一いっ盞さんの酒しうに病びやう軀く
 ずずらら尚なほ且かつ此この如ごとく陶たう然ぜん吟ぎん聲せいを漏ももらずまてな
 るるに引ひきかへ、手てを拱こうみ、頭かぶを垂たたへ、意いに
 思おもふこころのあるが如ごとき、朋とも友ともの態たい度に疑ぎ惑
 の目めを瞳みはりつ、
 未まだ不ふ快か、困こまつたな、何なん様ようも氣き分の悪わるい
 ここまは見みる氣きも食くふ氣きもないもんだ、何なん様よう
 づづれれば故こう人じんななかかららん、
 餘よ音おん嬾まここしして、北きた利り根ねに薄うすみみ舟ふね人ひとの一いっ齊せき
 振う向むくまて、聲こゑ朗らうかに吟ぎんどりり、が、今いまこの久きう
 瀾らんの情じょうを慰なぐすべく、盛もられたる一いっ盞さんの酒しうに病びやう軀く
 ずずらら尚なほ且かつ此この如ごとく陶たう然ぜん吟ぎん聲せいを漏ももらずまてな
 るるに引ひきかへ、手てを拱こうみ、頭かぶを垂たたへ、意いに
 思おもふこころのあるが如ごとき、朋とも友ともの態たい度に疑ぎ惑
 の目めを瞳みはりつ、
 未まだ不ふ快か、困こまつたな、何なん様ようも氣き分の悪わるい
 ここまは見みる氣きも食くふ氣きもないもんだ、何なん様よう

を、グツと一息に吞み干し、欄干高く梢は
 二階家の軒端に隠れ、半ば簾より現けれ居る
 柳を見て

客舎青々柳色新なり

と獨言のやうに口吟み、更に真嶋に向き直り

僕は船にも酔はな心、又別に氣分も悪くな

心から心配しを呉れたまふな。僕は君も知

つてる通り、一舩沈鬱勝の性質だが、併然

今日は特別に、此處に着く以前から唯妙な
 感慨が胸に浮んで来て、譯も無く憂鬱込ん

十一廿

て仕舞つて、久振に會つた君に碌々挨拶も
 せず、實に失敬した。君の病氣も佳心、方て
 はマア結構だ、今日は僕もやるから、君も
 いま少し吞みたまへ

こ己が盃を真嶋の前に推遣りつ、

と徳利を取つて、ピチヤ〜と振り試み、其儘

注がんとせしを、真嶋は急に推し止め

其盃を貰ふと、君のが無くなるから、今日

は献酬無した、：：：：：尤様か氣分が悪く

何ものかカラと微に響けり。此の僕の丸薬は、
 結列阿曹篤丸と言つて、
 醫者は唯氣安めに強壯劑だとばかり言つて、
 氣だから宜い、
 同い丸薬でもなア
 一言つて、
 丸の袂を振り試み、
 其袖中の
 一、實には、
 一枚の報道にも及ばな
 噛み碎いて唾にて頓服、
 それで全快仕候不
 一切の疾に効能ある清心丹五粒乃至十粒、
 の酔、酒の酔、其他痰咳、眩暈、
 立くらみ、
 く微恙を感じ候て、
 虫歯、
 痛飲、
 腹痛、
 船

君なぞは譬へば船に酔つたところて、少
 己自冷笑するが如き微笑を漏らし、
 フム
 其方の君の盃を呉れたまへな
 言ければ、真嶋は
 貸したまへ、僕、
 一ツお酌、
 何だ、不審ではな
 献酬無しだなんて、
 張君のにして置きたまへ、
 そして其徳利を
 先ア此盃は矢
 先ア安神だ、
 先刻から余り憂鬱込
 んで居るから實は心配した。

此方に

居る けれども これ は 君 きみ、結核 けつかく と いふ おそ 恐ろしい おそ 不
 治 ちやう の 病 やまひ の 特效 とつやく 薬 やく だ、今日 けふ あいり は 氣分 きぶん が 爽 さわ
 快 あつ だ、十年 じゅうねん の 痼疾 こじつ 何處 どこ へ か 去 い つ た やう な 氣
 が する けれども、矢張 やうばう 未 ま だ 此 こ の 石炭酸 せきたんさん 臭 くさ い
 九 く 藥 やく は 離 はな せ な い よ、徳 とく う い ふ 譯 わけ で 結核 けつかく と い
 へば 傳染 でんせん 病 びょう、それ で 君 きみ に 盃 さかづき を 遣 や ら な い の せ
 と 言 い つ て、真嶋 ましま は 無理 むり に 潮田 うしほだ の 手 て より 扱 も ぎ 取 り
 り たる 徳利 とくり を 傾 かたむ け て 推遣 おしや り たる 潮田 うしほだ の 盃 さかづき に グ
 ツ と 注 つ ぎ たる に、余 あつち に 急 きふ な り しかば、酒 さけ は 膳 ぜん
 に 溢 あふ れ、箸 はし は 水 みづ に 浸 ひ り たり。

十一廿 ぎ

6
 これは 失敬 しつげん
 と言 い つ て 徳利 とくり を 措 お き、酒 さけ も 此 こ の 盃 さかん に 盡 つ きたる
 真嶋 ましま は ハタ と 掌 て を 拍 た けり。
 と 返事 へんじ と 共 とも に、階子 はうご に トン と く と 足音 あしおと の し て
 女中 むすめ の 頭 かぶ、目 め、口 くち、襟 えり の あたり の 階子 はうご の 落 おち
 口に 現 あら げ れ し と き、真嶋 ましま は 徳利 とくり を 宙 ちゆう に 捧 た げ て
 これ の 代 か り
 畏 おそ り ま し た
 また トン と 足音 あしおと、身沈 みしづ み、天窓 あたま の 鬚 まげ の み 残 のこ り

るとき

一合だよ

またトン、フツと留も消えて、聲のみ判然と

畏りまーた

其二

お酌ませう

堂に乘せ

べツタリと座りて、左の手を疊に措き、右に

徳利を取つて、くるりと半圓に廻し、掌に乘

せ潮田に向けたるを、未だ酒の充分あるに

氣の附きてや、向き直りて真島の盃に注がうと

せるは、白粉、銀杏返し、縹子の晝夜帯、少

しく意氣過ぎたるもの、旅店、飲食店なんど

到るところ、一人ならず二人三人、呼んぞ酌

婦と言ひ、茶屋の姉さんと、地獄とも

縁

彼等は此等を野暮といふべし、無情き真島の言に
 ツンと返ちしが、振り向きざま、今用もなまに
 向座敷の縁の手摺に凭れ、両足を前に投げ出
 して、此方を睥め居る白粉と顔見合せ、如何な
 る事の可笑しきにや、冷笑の笑を漏らして、おぼろ
 の通しに又トンく。
 真嶋健三が不治の疾は余も切羽を醫者より
 聞き、て知り居れり、然るに、いま其朋友の為
 に至振に、諧謔にも清心丹の効能を述べ、一
 時の快潤を装ふ心の内、而も己が疾の傳染病
 なるを自白して、其累を他に及ぼさ
 らんと

別行

いふ、落るものもあれば、出所は何
 處、言葉を聞け、純粹の東京、流れて来た
 いふ。何日の洪水に、何処の川筋をたどりに
 や、いづれ水の上に浮く性質なればなるべし
 潮田は固より真嶋も共に沈静む性質なれば
 調子の合ふやうもなく、真嶋はいま注がんと
 せる徳利を無意識に女中の手より接ぎこりて
 自ら注ぎつ、
 ア、女中さんお酌は宜いから、おの蝦のお
 ぼろの代りを呉れ

する好^{こう}用意^{ようい}に感^{かん}歎^{たん}のあま^{あま}り、何^{なに}が故^{ゆゑ}に此^この好^{こう}
 人物^{じんぶつ}の忌^いむべき嫌^{きら}ふべき不^ふ治^ぢの病^{やまひ}に罹^{かつ}りしか
 こ嘆^{たん}息^{そく}の他^{ほか}なく、加^か之^しも先^{さき}刻^{とき}に打^うたれたる感^{かん}
 慨^{がい}の未^{いま}だ去^さり遣^やらねば、潮^{うしほ}田^だはいまの酌^{やく}婦^ふの
 去^き就^{しゆ}も知^しらざるまてに俯^{うつむ}向^むきたるま、憮^ぶ然^{ぜん}と
 して黯^{あん}澹^{たん}にむせびたり。
 真^ま嶋^{しま}はふたたび此^この潮^{うしほ}田^だか態^{さま}度^まを見^みて
 君^{きみ}は奈^な何^{なに}したといふのか、愈^い々^い沈^ふ鬱^{ふさ}込^こむぢ
 やなにか、何^{なに}か氣^きに罹^{かつ}る事^{こと}でもあるのか、
 有^あるなら何^{なに}も朋^{とも}友^{ゆう}だ話^{はな}したまへ
 〽

〽ある、あるが何^{なに}も自^じ他^た共^{とも}に心^{こころ}配^{ぱい}する事^{こと}では
 な、^いそれは後^{あと}判^{わか}る、また後^{あと}で話^{はな}すが、
 それより君^{きみ}の病^{やまひ}氣^きは何^{なん}様^{よう}だ、此^{こゝ}以^も前^{まへ}遇^あつた
 時^{とき}より少^{すこ}し顔^{かほ}色^{いろ}も佳^よいやうだが、少^{すこ}しは良^よ
 心^{こころ}が、早^{はや}く癒^{なほ}らんと困^{こま}る、そして此^{こゝ}頃^{ころ}は何^{なに}
 か傑^{けつ}作^{さく}は無^ないか
 〽いや、僕^{ぼく}の疾^{やまひ}は今^{いま}いふ通^{とお}り不^ふ治^ぢの病^{やまひ}、良^よ
 いと言^いつても全^{ぜん}快^{くわい}する事^{こと}ではな、然^{しか}し此^{こゝ}
 頃^{ころ}は盗^{ぬす}汗^{あせ}も出^でず、熱^{ねつ}も金^まくな、^いやうだが又^{また}
 秋^{あき}になつて寒^{さむ}くなると思^{おも}くなるのさ、ツイ

此の

去る女中を見送つて、真嶋は更に語を續け
 一體先刻から君の氣にして居るのは何だ、
 僕までが氣になるから、差岡のな以事なら
 話したまへ
 近邊に晝も猶コトとヤを叩くそれの
 水鶏の聲に耳を敲て唯恍惚と遠く過去に返
 りて、現在の我を忘る、ましてに聞き惚れたる
 潮田は真嶋の間に夢の境より覺めたる如く吾
 に復りて朋友をば瞻り、其問には答も無く、
 突如として

併も夏の景物

先達て入梅中、さては矢張り暮方になると熱
 が出て氣分が悪くつて困つたが、さういふ
 時は病氣が病氣だし、全く望みも何も無く
 なつて心細くなる。此頃は少しは良心が怠
 惰をばかり居て晝も書かず、否書けもせず
 何して見ても面白くなく、只四五日以前氣
 分が宜かつたもんだから、久振で大船津の
 方まで遠足して寫生して来たものが一枚あ
 る而已だ
 と言つて、今蝦のおぼろを運び来て、其儘立

氣がする。而して即今の節が一番見時だ、
 何も橋の見時といふ事もな~~い~~が、邊の真菰
 が茂つて見渡す限り此通りに、何處までも
 真青で、先達と三月未だ雪の降る頃故國の
 者が見舞に来て呉れたが、其時でさへ驚い
 と去つた、然し現今の景色を見せたかつた
 、それでも其頃は、河岸に枯葦ばかりでも
 小雨の降る日に園部河の川霧が立つて、蓑
 笠に釣棹を擔げて、土手傳に枯柳の下を行
 くのが、近~~い~~ところでも朦朧と隱見に遠く

なつて見えるなぐは實に一幅の畫さ、僕は
 田舎漢だから吾妻橋の鐵橋には驚いても、
 然し面白~~い~~とは思はな~~い~~よ、何も風流がるて
 はな~~い~~、君は米澤、僕は會津、片互に山
 國だ、僕は徳庵水村に来ると殊に珍らしく
 面白~~い~~と思ふが、君は此邊を何様思ふかぬ
 と言はれて、潮田は
 全く此處だな
 と言
 獨言ちて
 いや、橋が小さ~~い~~から名所でな~~い~~とかツマ

の浦で釣しながら船遊びをやうと思つて居るのだから、態々見に行かなくとも、其時其橋の下を通るんだが、君は何んだ見た事どもあるのか、此処には今日始めて来たのだらうに異様いな
 君、其橋が僕の知つてるのであつたらう、僕に一つの奇談がある、兎に角見ながら話さう、沈鬱ふさげ込んだのも其為だが、若しさうであつたらう、君の一昨日の書面に僕は謝すと言つて、何が故にや潮田は、悲壯の眉を動

居を

ラないとかいふ譯でない、それで宜いい、唯僕は今まで潮来の十二の橋といふ事を聞きいて居つても、全然想像し損つて居つて君の書面にも詳しくあつたのに、勘違かちがして居つた、僕わと知らば、僕は君の手紙を待たずとも、最もと早く来るであつた、而して其橋は今日の中にも見られるところぢやな
 りん牛堀から潮来まで一里足らずだから、おれからでも見られるが、暑あついから此地を暮方になつて出かけよう、ごうせ明日與太

所

かしたり。

其三

真嶋健三は畫家にして今年三十歳、一昨年末
 術學校を卒業して、其以前より肺患に罹り居
 りしを去年の冬更に疾の重なりかは、醫師よ
 り熱海大磯然るべき土地に轉地を勧められし
 に、病患の身の唯一人、旅の宿にあつて、何
 時如何なる病變のあらんも知れずと、潮田は
 朋友の身を氣遣つて、幸東京よりは暖く空氣
 も新鮮なりと聞く潮来に、己が郷里なる醫師
 湍村の閑業一つあるを思ひ出して、何かと

十一廿

一と稱美やりたるなり。
 さておそ、新學士潮田保は、今朝千駄木の宿
 を立て、田端より水戸行の列車に乗り、三河
 嶋より尾久の方一帯、朝靄の青田の中に近き
 は明瞭に、遠きは隱見に斑々と宛然雪の降り
 たるや、白鷺の群れ居るに目覺め、輾々と
 進行する汽車の中に、右に手賀、左に牛久を
 眺め、土浦より汽船に乘換へ、霞が浦を一直
 線に凡七分目も来りしと思ふころ、風も無き
 に船は揺れは揺れたれども、単靴より寶丹を

の雨沼

便宜からんとて、懇に紹介状を以て真嶋をば
 託したるなり。
 其後真嶋は櫻の節、用事を兼ねて出京せしも
 其頃は水村の景色も尤程にはあらず、ま
 た潮田の卒業以前なれば、別に勧誘もせざりし
 が、現今は五月雨も過ぎ、田植も終りて
 青田となり、蒲・真菰・葦・蘆の茂りて三伏
 の夏猶涼氣に、殊には潮田も此度文科大學の
 卒業へたれば、一時の骨休めに避暑がてらに
 来るや、手紙の末には潮來の景を言葉を書

ちて、さておそ真嶋の不審を引けるなり。
 おぼろの血の痕再度見え、夏の日も傾きて、
 真菰に戦ぐ風涼しく、釣船・田船・藻刈船
 土地の船歌・櫓聲に和し、皆一様に河岸に向つ
 て船漕ぐころ、廳で割烹店を立去りし兵子帯
 にステツキの真嶋健三と旅装の身軽き洋服の
 潮田は、革靴は軽し、蝙蝠傘の先に引掛けし
 ま、肩にかたげて、二人一齊パナマの帽に夕
 日を除けつ、潮来の方に向ひしが、前面より來る
 行商の聲可笑く、

取り出すまでにもあらざりしが、霞が浦の末
 浮島の見ゆる邊より潮田は或物の胸に浮び、
 潮來に着くべきを故意に牛堀まで迎へ呉れし
 真嶋と共に此処にありて、一別以來の久濶の
 情を慰すべく一盞を傾けたるに、いま又此の
 水に近き二階より、近くは北利根・横利根
 潮來の十六嶋より、遠くは霞が浦・下利根
 香取の森を眺めし時は、此別天地の猶現世の
 ものなるかともす驚かいつ、思はず絶叫もす
 べかりしに、先刻よりの感慨爰に益々胸に満

の行

とも言つても
よい低い
香取の森
成す事しな
く二人は直
に寝に
就きしが

いさめやいさめをるともに、
 にひろむべし、せみくやかんめせいでい
 は、にほんむひなるかでんにて、とくもと
 たしいの**遺法**はふやく、そのたひかうはいち
 じるし
 此の邊にも賣り歩行く、洋服に軍人帽の
 賣藥商と摺れ違ひざま
 用 効能知
 もちめてかうのうしりたまへオ一二
 二耳元近く聲高に叫ばれしも、内に**念**のある
 潮田は、邊の景色の景色なれずや、此奇異な

る聲にも深く哀を催したり。
 微醺を帯びたる潮田真嶋の西人は夕日に右の
 横顔を照されつ、柴崎邊に來りし頃は、日
 は遠く西の方地平線に隠れ、水無月十四日
 の月は天近く東の杜、梢の上に現れたり。
 潮來に着きては直に二人連れ立ちて、醫師な
 る瀧村先生を訪ね、一別以來の挨拶、真嶋の病
 ち度々卒業、先生の流行の模様、真嶋の病
 氣、彼れ一句、此れ一句、互に言葉の盡きで
 其夜は病家に急患のありたれば、明

庭樹に
かゝる
の
凌宵花

十二の橋

真嶋潮田の兩人は、夏の日の涼き間と、曉の
 鷄聲に起き出で、小草の露を踏んで、田舎家
 の塙根の朝顔に目覺め、宿より十丁余なる稻
 荷山に登りて、佐原津の宮香取の森下
 利根の流に沿うて西より東に瞳を凝らせば、
 朝靄の晴るゝに従ひ、矢田部東下鉦子の
 沖も見渡さるゝばかりに、唯一望の眼界、此
 才は園部川、向ふは下利根、與太の浦、浪逆
 浦、目のおよぶ処皆水に、水のかぎり利根の

日を約して二人は真嶋の宿に帰りたり。
 病軀には過ぎたる今日の運動に疲れて、鼾聲か
 くまでなる真嶋に引更へ、潮田は不思議の感
 慨に胸潰れて、明け方、短夜の夢結ばざりし
 が、晝のうち言葉といひ、如何なる事の其
 身にありてにやあらむ。

と香取の間にして常陸下總の界にあり焉、加
 藤洲より與太の浦に連る其名を新左工門河と
 呼ぶ長さ八丁、幅二間の小河に掛るるものに
 して、其形態平常に異なれり、唯見る霖雨
 に水嵩増しては、橋板を浸すの恐れあればに
 や、兩岸に二段或は三段の階段を設け、為に
 地より遠離りて天に近付く事三尺、恰も是れ
 華表の如く、橋桁無くして唯一枚板を豎に渡
 し、櫻欄繩藤げの欄干は而も片一方、而して
 行人渡るに一人を限り、二人行き會うては一

白帆、水草の葉末に止まる蜻蛉の他、蒲、真
 菰、青田の稲、青草、緑水、碧天に映じて、唯是
 瑤殿中に入るが如し。
 かくて再度宿に帰りて朝餉を終り、日は高く
 昇りて、大船津より土浦に帰る小蒸汽船のポ
 ーと音して、河岸に沿へる宿の前を通るころ
 二人は一般の艇に棹さして園部川を溯り、
 北利根に出で、船は徐に加藤洲の水門に着き
 たる時、二人一齊十二の橋を見渡したり。
 若夫れ、潮来の十二の橋は、あられふり鹿嶋

人とは後のちに退ひるを常つねとす、皆みな一ひと様に細こま小ちひなる名な
 に負おふ槁こ數かず十二じふに也なり。
 棹さの艇かたを操あやつるに従したがひ、一ひと槁こ去さつて一ひと槁こ来きたる、
 一ひと二ふた三さん四よ、數かずふる十二じふに、槁こ全ぜんく盡つきて莞はたる
 湖みづうみは與よ太たの浦うらなり。
 唯ただ汪わう々々洋やう々々たる水みづは清きよく澄すみ湛たへ、微ひ風ふうに漣さざなみ
 一ひとつ而のみ已ひ、乾けん坤こんに塵じん埃あひなく、棹さの翠すい玉たまと碎くだげ
 一ひと舷へんに菖あやの蒲まこも真ま菰もの葉も摺すれして聲こゑサラくと、
 彼かれ立たちて棹さを取とれば此これ座ざして静しづ寂じやくに、彼か
 座ざせば此これ立たちて棹さを採とる矣や、此この別べつ天てん地ち
 一ひと處いして自じ他たあらんや、利り害がいあらんや、善ぜん惡あく
 忘わすれ、邪いや正ただ忘わする。二ふた人一ひと齊ひとしく言ことば葉はなく端たん然ぜんと
 一ひと單うす物ものの襟えりを正ただせり。
 此この時とき舟ふね中ちゆう聲こゑ無なくも舟ふね人ひとの情こころは却かへつて語ことばあるに
 勝まさり、悄せうとして江かう上じやう唯ただ白はく鷺ろの飛とぶを見みる。
 真ま嶋しまは棹さを高たかく水みづ面めんより抜ぬきて、再またび深ふかく水みづ
 中ちゆうにヅプリと差さし、軀みを斜なに足あしを張をれば、船ふね
 は淺あ瀬せの方かた蒲つた真ま菰も長ながく生おひたる繁しげみささく
 と隠かくれたり。同その時ときハタと羽は叩たたき、
 やあらん、水みづ鳥とりの駭おそきと己おのが浮う巢すり飛とび立た

人とは後のちに退ひるを常つねとす、皆みな一ひと様に細こま小ちひなる名な
 に負おふ槁こ數かず十二じふに也なり。
 棹さの艇かたを操あやつるに従したがひ、一ひと槁こ去さつて一ひと槁こ来きたる、
 一ひと二ふた三さん四よ、數かずふる十二じふに、槁こ全ぜんく盡つきて莞はたる
 湖みづうみは與よ太たの浦うらなり。
 唯ただ汪わう々々洋やう々々たる水みづは清きよく澄すみ湛たへ、微ひ風ふうに漣さざなみ
 一ひとつ而のみ已ひ、乾けん坤こんに塵じん埃あひなく、棹さの翠すい玉たまと碎くだげ
 一ひと舷へんに菖あやの蒲まこも真ま菰もの葉も摺すれして聲こゑサラくと、
 彼かれ立たちて棹さを取とれば此これ座ざして静しづ寂じやくに、彼か
 座ざせば此これ立たちて棹さを採とる矣や、此この別べつ天てん地ち
 一ひと處いして自じ他たあらんや、利り害がいあらんや、善ぜん惡あく
 忘わすれ、邪いや正ただ忘わする。二ふた人一ひと齊ひとしく言ことば葉はなく端たん然ぜんと
 一ひと單うす物ものの襟えりを正ただせり。
 此この時とき舟ふね中ちゆう聲こゑ無なくも舟ふね人ひとの情こころは却かへつて語ことばあるに
 勝まさり、悄せうとして江かう上じやう唯ただ白はく鷺ろの飛とぶを見みる。
 真ま嶋しまは棹さを高たかく水みづ面めんより抜ぬきて、再またび深ふかく水みづ
 中ちゆうにヅプリと差さし、軀みを斜なに足あしを張をれば、船ふね
 は淺あ瀬せの方かた蒲つた真ま菰も長ながく生おひたる繁しげみささく
 と隠かくれたり。同その時ときハタと羽は叩たたき、
 やあらん、水みづ鳥とりの駭おそきと己おのが浮う巢すり飛とび立た

に落^{おち}てチウと消^きえたり。

與太の浦

潮田は漸く吾に歸りて

いや難有^{あやう}

と言へども手には取らず、心易^{こころやす}立ての真嶋^{ましま}は

其言語を不審^{いふか}りて、

何だ、朋友の煙草一本に難有^{あやう}なんと慥^{たしか}慥^{たしか}な

市挨拶には驚^{おどろ}いた、蓋^{はた}し心焉^{こころ}にあらざれ

はなろべし、君は餘程^{あまほと}何様^{なによう}かして居^をる

と此の諧謔^{かいぎやく}の言にも潮田は真面目^{まじめ}に

ソや僕は全^{まった}くあゝる此処^{こゝ}にあらすだを實^{じつ}は

事を連想するに随つて、當時戀しく、悲哀
 の念群々と涌いて来て、それがたぬ君に怪
 しまれるまでも沈鬱ぶんだのだが、
 、、、七歳の小児幾多の春秋を餘所に見
 て、今年二十八歳、この潮田、正にこれ一
 昨々日の君が一片の書面に因つて再度此所
 に邂逅し得たのを實に謝す
 と言つて、手を組みジツと首を垂れたり
 今日此の浦に釣すべく、道具も準備して来
 れるなれば、真嶋は兎に角二人の針に餌を附

け糸を垂れたから、意はそれには少しもなく
 昨日よりの潮田が態度を異として、その奇談
 を心閉寂に舟中にて聴くべく思ひ居りたるな
 れば、唯熱心にそが問をおもひたり。
 何で、昨日からの君の態度も判然たが、
 何で那樣小児の時故國から此地まで百里餘
 も隔離して居るのに、而も君は六歳の時既に
 両親が無心と聞いて居るが誰に連れられて
 何為に此地まで来たのだね、それに其頃は
 未だ汽車も無かつたらうに妙な經歷がある

てはなひか

潮田は首を擧げて

レや畢竟その六歳のとき母に死別た為に起

つた事て、子供は無邪氣なとんだ、其の死

んだ母を尋ねに出で終末には此処まで来た

のだが

何様して死んだものを此処まで尋ねに

マア聞き給へ、漸々譯を話すから、道連の

者が連れて行つて呉れたなら、此処までど

あるか何処まで行つたか知れば志なひ、あ

る場合から故郷に帰る様に成つたからであ

るが、さうでなひと今頃は此の潮田、何処

に何様して居つたか知れば志なひ、それで

其譯から、其二年越し、子供の旅の種々な

面白かつた事、悲しかつた事、恐ろしかつ

た事、夢の様、迂路覺に記憶を居る事を今

君の前に話すが、君は倦かなひで聞き給ふ

ノ、

ノ、諾、聞く、聞くとも、大に聞く、天氣は好

浪はなし、無論下宿屋の胴間聲の詩吟

懐

懐

覺りては、二十年の往時僅に八歳の微軀を以
 と、暑に中り寒に曝され、雨に泣き風に恐れ
 し、當時の逆旅を追懐して爰に再び感慨胸に迫
 り、坐に懐舊の涙さしくみて眼を兩岸の風光
 に廻らす事も得ざりしを、いま始めて朋友を
 促して舟中に立てり。
 見渡せば北は潮來の稻荷山、扇島、西は中洲
 ●長島 ●八筋河 ●大島 ●三島 ●塚島より、東
 ●は加藤洲、磯山邊、名に「おふ潮來の十六嶋」の
 藁屋の家は、その軒端まで真菰に隠れ、宛然

や、ドタンバタンの舞はなし、舟中閑静
 に二人相對して、君語れば吾聞くのみ、一
 層靜肅に慎んで聽く、話し給へ
 真嶋は乘氣に従ひたり。
 隨分永以話したが、それとも君が聽いて呉れ
 るなら、悠然話すが、先刻から唯茫然して居
 って能く近邊の景色も見なひて居つた、マ
 ア此の景色を見ようてなひか
 と先に十二の橋の第一の橋を望みし時より、
 尤手の岡の佛閣まで昔の儘なるに愈々此処と

筑波の山、鉤子の海、西北より東南、其間二十
 有餘里、一望の水村、日本の洞庭、人寰を隔
 つる萬里、湖心浪静かなるところ、孤舟雙客を
 乗す、一人は語り一人は聴く。
 一鳥啼かず、水流れず。
 潮田は襟を正して
 心も話す事だが、僕が三歳のとき父は死
 去なつたので、容貌の記憶もなく、随つて
 戀し心も思はなから、母は僕が六歳の冬

藍の山

野に笠を措きたる如く、斑々と唯屋根のみ現
 れ、群れ飛ぶ白鷺は青天緑草に緑れず、分
 明に數へられ、微風に靡く青草は高く天に接
 し、一片の白雲もなく晴れ渡れる今日の天は
 低く水に連れり。

丁度今後五六日で大晦日が来ると以ふ一週
 間ばかり以前から病み出して、急遽に死去
 になつたが、後年姉に聞けば、迎も助からぬ
 命と思つてか、僕より四歳上の其當時僅に
 十歳の姉を枕もとに呼び寄せ、僕の事を
 心配して、母様が死んだ跡で坊やを親切に
 世話して呉れと、呉々も姉に頼んだ。そ
 婆様があつた。夜は其お婆様と姉さんとの
 間に抱かれて寝たが、母様に抱かれたと違
 ひ、何となく寒々やうな気がして心細かつ
 たのは現今でも覚えて居る。其程だから其
 時の子供の悲しさといつたら譬へやうもな
 かつた。併し僅十歳でも姉は姉だけに、そ
 の後母様に代つて僕を深切に、と呉れた。
 母の葬式の時、誰であつたか、何れ親戚の
 ものであつたらう、大きな男に抱き上げら
 れて子供は位牌を持つて雪の中を墓場まで
 送つた記憶がある。全然焼香場の三法師君
 への越えて五六日、その正月は何様して過

丁度今後五六日で大晦日が来ると以ふ一週
 間ばかり以前から病み出して、急遽に死去
 になつたが、後年姉に聞けば、迎も助からぬ
 命と思つてか、僕より四歳上の其當時僅に
 十歳の姉を枕もとに呼び寄せ、僕の事を
 心配して、母様が死んだ跡で坊やを親切に
 世話して呉れと、呉々も姉に頼んだ。そ
 婆様があつた。夜は其お婆様と姉さんとの
 間に抱かれて寝たが、母様に抱かれたと違

山にも小草が萌え出で、天高く鳴いて居る
 為のやうに羽でもあらば、何処か遠くへ飛
 んでも行か度やうな目であつた、其當時十
 一歳の姉が山に摘草に行くからと言つて、
 僕にも仕度さして家から連れ出したが、丁
 度門の前の小橋の処まで出ると、川下の方
 から親子連の二人の六部が来た、鉦鼓を叩
 きながら門の内に入つたもんだから、姉
 は態々家に戻つて奥からお錢を出して来て
 手の内を呉れ、そして再び戸外に待つて居

したか少しも記憶がない、大抵姉と二人で
 朝夕泣き暮して居つたらうと思はれる、今
 更その當時の事は詳しく話さなから、一日過
 ぎ二日去り、僕は其年七歳の春、丁度三月
 の末と思ふ、家内に以前から居つた老僕に
 門田の慈姑を堀らして、お婆様が門の前の
 小川で洗つて居ましたつけ、其日は春のお
 こ花曇りがして、天氣麗朗に、雪解の水は田
 にも川にも漫々と満ち温んで、苗代は種
 漬がしてあり、水揚の花が飛んで、野にも

黄色な

に登ると、藤も躑躅も未だ咲かなかつたが、
 柴櫻がちらほらと、それから連翹のやう
 な萬作花といふ花が咲いて居つて、二人は
 ばけが（葉に袋に）といふものを腰にして、獨活
 五加木、通草の萌などもあつた、長閑な
 春の陽炎の中に、右に巖を採り、左に狗脊
 を折つて、姉弟互に助け補けられ漸々山に
 登つた、其の山の頂上に登つて四方を見晴
 らした時、僕は初めて壺の中の廣以事を知
 った、そして小兒ながら自分の村の周圍の

る僕の手を引いて門から出ると、六部の子
 は女の子で丁度僕の姉位の年恰好で容貌ま
 で似て居つたが、何故か珍らしさうに僕等
 を瞳めて居る、姉も度々振向いて其の子を
 見送ると何時までも立盡して居る、僕等は
 二丁程も離れたと思ふある、六部の子は餘
 りに親に後れたもんだから、小走りに走つ
 て行つた。親の跡を追つて行つた。
 道々、董茅花などを取りながら、十一歳の
 姉と七歳の弟が、家から半里ばかりある山

山の陰は甚麽であるかと始終考へて居つた
 其の疑が晴れた。
 其の頂上にて二人は枯草の上に休息で、日脚
 が丁度晝頃なので、姊は其のほけぶの中か
 ら握飯を出して呉れて二人で食たが、其時
 程市飯の美味かつた事は無^いやうに記憶て
 居る、それから暫く得物などを數へて休ん
 で居ると、南の方から雁の^一列が掉になつ
 て来て、山が高かつたもんだから、僕等の
 頭近くカリカリ^と鳴き渡つて漸々と遠く
 北の方に飛んで去つた、二人は其方を眺と
 見送ると、百里もあるかと思^はれる遠^い所
 に淡く藍色の山が見えたが、雁は其の山の
 方に小さくなつて見えなくなつた、姊は其
 の時保^ちやん市覽、前面に青く山が見える
 だらう、彼處まで何里あるか、確か南部の
 恐山でもあるか知れな^いね^えと言つたから、
 僕はなんぶのおそれさん^と何と聞くと、
 は南部の恐山といふのけね、皆な死んだ人
 の行く処なの、其処に行つて見るとね、死

山は其の方を眺と見送ると、百里もあるかと思はれる遠い所に淡く藍色の山が見えたが、雁は其の山のの方に小さくなつて見えなくなつた、姊は其の時保ちやん市覽、前面に青く山が見えるだらう、彼處まで何里あるか、確か南部の恐山でもあるか知れな^いね^えと言つたから、僕はなんぶのおそれさん^と何と聞くと、は南部の恐山といふのけね、皆な死んだ人の行く処なの、其処に行つて見るとね、死

熟

其処に母様が何時までも何時までも居るの
 居なくなるゝ要から早く行つて見やう
 よ、姉さん早く行かうよと死んだものが他
 に轉じて其処に居なくなると再び遇ふに
 事と思つて僕は心配でならなかつたが、そ
 うすると姉は保ちやん二人ばかりで迎も行
 けな以上、そして死んだ人だから何時まで
 も其処に居るんだよ、それだから早く大人
 に成つて行かうよと姉は姉だけに小児の
 力の及ばなから事を知つて諦めても、僕は

去だ母様にでも父様にでも誰にでも遇けれ
 るのよ、保ちやんは母様より知るまひけど
 も、姉さんは父様も知つて居るよ、行つて
 見度いね、先刻さら家から出るせよ、六部の
 子が来たなら、彼の子も恐山に母様にでも
 遇に行くんだらうよ、彼様父様でもあると
 連れて行つて貰ふだけども、迎も子供ばかり
 りで行かれる処ぢやない、保ちやんも早く
 大人になつて二人で行つて見やうねと言つ
 たから、僕は小児心にも珍らしく思つて、

何処までも目が冴えて来る、小児心にも種
 遣つて居るのだから、家の内も淋しくつて
 に真暗な処に一人ばかり目をパチクリ
 胸に浮んで、何様しても眠られな、それ
 ち姉から聞いた、恐山に居るといふ母の事が
 も微小に、軒聲の聲がするの、僕に晝の
 たが、姉は晝の疲勞に能く眠つて、お婆様
 のやうにお婆様と姉さんとの間に寝かされ
 〇それから其日の暮方に家に帰つて、いつも
 家出

さう聞いて、矢も盾もたすらず、小児ごろろ
 に、今日此の高山に登り得て、吾ながら
 剛氣のどもの毎日、毎日少づづ、でも行つたな
 ら、何時か藍色の山に行き着かな、事はある
 まよと此時よく、思ひ込んだ。そして再
 度、蕨を取りなから、その恐山に行く、血
 の池だの、賽の河原だのと種々な恐ろしい
 地獄のある事を姉から聞いた。

小児でも中々賢い、姉の蝙蝠傘を持ッて其
 のまゝ、家をとび出した。春の夜の残月が朧々
 小児は戸外に出ると、遠方で犬か狐
 と家の棟高く懸ッて居ッて、其
 かキヤン／＼キヤン／＼と啼ッて居る、其
 時は恐ろし／＼より何となく小児心にも
 悲しくなツて来て、その儘夜の門の外に佇
 んで居ると、彷彿と／＼と氣の如く、朧夜の
 中空に母様が現れたがね、母は何にも言葉
 なく、僕は小児のおとなり唯棟然凄心やう

裏

此処まで来れるならんと早くも想像したれば
 なり。而して、それから何様した
 何かから、姉に知れると多分止められる事
 と思ッたから、目覚めな／＼やうに静肅起
 て、枕下の手洋燈に火を照して、村の御祭
 に着て行ッた事のある衣服を簞笥から取出
 して着たさうしてお婆様が切餅と干飯とを
 交せて炒ツて呉れたのがあツたのを紙袋に
 入れ、風呂敷に包んで大黒背負に背負て、

氣で出たんだよ、晝の中僕が恐山の話を
 て聞かせたもんだから、それで出たんだよ
 、未だ遠くは行くまゝから早く老僕を起し
 てお呉れ、妾は先に行つて見るからと、川
 下の北の方に走つて行つた、さうするとお
 婆様は何の事だ、恐山で何処の恐山の事や
 ら、何為にまた出たんだな、狐にでも騙ま
 れたやうにと諄々獨言を言つて居ました
 けが、恐山は北の方だから、姉は其の方に追
 駆けたのは無理はな、僕は唯々六部親子

な感に打たれて暫く立縮んで居つたが、又
 懐かしくやうな気がして母様と呼ぶとす
 ると、家の中で保ちゃん、保ちゃんと呼ぶと
 ぶでせう、見付けられてはと小走りに走つ
 と、門の前に道路を隔て、物置があつたが
 、その陰に暫く隠れて居ると、ガタ／＼と
 さして家から姉とお婆様が出て来たが、お
 婆様は小児は他に行きやうがな、戸外の
 便所にでも居るだらうから探索るが宜しと
 いふと、姉は泣聲にお婆様保は恐山に行く

更さらに語ことばを續つぎ、
 津つの宮みやに向むかつて徐しづかかに漕こぎ去さるを見送みおくりて、
 の間あひだを往復あきまきすなる渡船わたしがねの、潮来いたたの方はうより来きて
 び。潮田うしほだも暫あひし言葉ことばなく、今いまも潮来いたたと佐原さきはら
 場ばき真島健三ましまけんざうは、泫然げんぜんとして思おもはず黯淡あんたんに噎むせ
 よと、肺癆患者はいろうあやの神經過敏しんけいこうびんにて何事なにごとにも感かんじ
 月下げつが無邪氣むじやけに走はる健氣けんけにも哀あなれなる小児こどもの態度せいま
 遠とほく千里せんりに旅立たびたちして唯一袋ただいったいの糧かてを包つみ、三更さんげ
 六十六部ろくじゅうろくぶ
 小児こどもは直走ちたばうに走はつて村端むらはづれまご

の跡追あとおふ積りつもりだから此時このときと思おもつて南みなみの方はうに
 驅かけ出だした、さうと知らしらならぬで北きたに向むかつた
 姊あねさんさんが遠とほくの方はうで保たもや保たもやと呼よぶ泣な
 手て聲こゑが聞きえ、その呼よぶ聲こゑが漸だん々ぜんぜん遠去とほざかる、
 田舎家いなかやは皆寝沈静みなねしづんで窓まどに寫うつる火影ほかげもなく、
 有明ありあけの月下げつがを走はる小児こどものかけに風かぜのまに、
 母ははの影かげが添そうて来くるやうな思おもひがして、
 度々たびたび身後うしろを振り向むいたが、保たもやと最後さいごに
 一聲ひとこゑ、幽微かすかに遠とほく聞きき残のこして、一年越いちねんこえ、
 れが姊あねとの離別わかれであつた
 十じ七しち

隣村を越して村端れまで来ると、道路の傍
 に辻堂がある、腹が減ったので其の辻堂に
 這入って風呂敷包を下して、乾飯の炒たの
 を喰たが、遽に睡氣がして来て其の儘其処
 に眠って仕舞った。
 カンくと近く鉦鼓の音が耳に響いて目を
 覺すと、前の日の六部親子、其晩何処に泊
 ったか僕より後になつて、其時其処を通り
 か、つたのだから、僕はそれと見ると辻堂を
 走り出て、矢庭に六部の袖を掴まへて連れ

来ると、田圃にはコロコロと蚯蚓か蛙が
 啼いて居つて、諸方の家鶏は睡さうな聲に
 ときをつくり、有明の月も山の端に沈んで
 間もなく白々と東の天が明るく、村界の
 橋を渡るころは、朝靄に太陽は隠れて居つ
 ても全く夜が明け離れたが前の晩から小兒
 は少しも眠らず、それに晝からの疲労もあ
 り、姉の事なども胸に浮んで心憂く、氣も
 進まずに、蝙蝠傘を杖にして兎も角とほ
 とと歩行したが、丁度その日の晝頃であつた、

と娘むすめにいふと、女をんなの子は父上おとうさん此子このこは昨日きのうそ
 ら、此この前まへの村むらで大きな門かどのあつた家うちで見
 た子こだよと言いつて、僕ぼくに向むかつてお前まへ姉あねさん
 があるねと言いつたからあアと言いつて垂首うなづく
 と、親おやの方がまた父上おとうさんは何様どうようしたと聞きい
 たから、父上おとうさん無な以いよ、姉あねさんは父上おとうさんを知しつ
 てるけども、私わい父上おとうさん知らな以いよといふと、
 嗚呼ああ、小ちひさいのこに西親りやうおんとももに無な以いと見みえる、
 然さにいつて敷と俯向うつむいた儘ままで居をるから、
 小兒こどもは暢氣のんきなもんだ、別べつに連つれて行いくと言い

と行いつてお呉くれ、私わい母様おつかさんに遇あひに行いくんだ
 から、といふと、六部むくは小兒こどもに袂たもとを捉とられた
 儘まま、徐しゆに笠かさを除とつて其その辻堂つじだうに這入はいつて休やす
 息すんだが、人品ひとがらの善よ以い四十歳しじふさいばかりの父上おとうさん
 であつた、坊ぼくぢやん、何処どこへ行いくの、母様おつかさんは
 何処どこに居をるのと聞きいたから、僕ぼくは恐山おそれさんに行い
 くの、母様おつかさんが死おん去んて仕舞しまつて恐山おそれさんに居をるか
 ら其処そこに遇あひに行いくのといふと、六部むくは何
 様さまぢやん、徳とく磨ま小ちひさいな子こが、可哀相かあれさまに露つゆや
 お前まへと同様おんなじに此この子こも母様おつかさんがな以いと見みえる

居らぬ、兎に角六部親子が深切に可愛かつ
 事ばかりで、憂い難らば事はあまり記憶を
 からだか、併し大概は珍らしく面白かつた
 越え、憂い、艱らば、面白事の旅はそれ
 貰つて、僕は七歳の春の暮れ愈々國の境を
 ぶる彼の大きな笠、小兒相應なめを買つて
 蝙蝠傘は其時何様したか忘れた、六部の冠
 の市街まで来ると、鉦鼓は持たなかつたが
 僕ぼくの村むらから下度十里近く隔へだたつて居る米澤
 れた。さういふ具合で一里行き二里歩み、
 僕ぼくの村むらから下度十里近く隔へだたつて居る米澤

に返すに忍びなかつたものと思はれる。後
 ぐ姉あねに聞けば、心配をさせまいと思つてか
 六部の親は無名の書面に其譯を書いて僕ぼくの
 村役場宛に手紙を出して置いてあつたさう
 だ。そして乾飯も幾日もある筈がなから
 無論三度の食は六部に喰はして貰つて、美
 味いものなとあるときは第一に僕ぼくに呉れて
 其の娘の子も里の犬になんど吠えらるゝ時
 はいつても自分の身後に僕ぼくを回護つて呉れる
 といふやうに眞の姉あねともなく親切にして呉
 味いものなとあるときは第一に僕ぼくに呉れて

其の旅の梗概は唯迂路覺に記憶し居るので
 順序も何も能く知つて居るに
 珍らしきと思つた事、恐ろしかつた事、
 面白かつた事を処々切れ切れに話すが、其
 の積りで聞きたまへ
 諾、よく
 と點頭きつ、真島は先刻よりの釣棹に氣の
 注ぎて、試みに絲を擧ぐるに、餌は元のまゝ
 にして魚は少しも喰はず。此の日夏には珍ら

磯刷松

〇呉れたからでもあり、それに小見は一生
 懸命藍色の山に行き着いて早く母様に遇
 度、前途に望みが山の如くあつたからであ
 〇

しく冷涼しく志て、船にては少しく寒さを覺
えたり。

左様

と潮田は目を閉ぢて、暫し話の順序を考へ

米澤の市街を離れると直ぐ國境の峠に差掛

つたが、其処は何処であつたか、現今考へ

ると其の峠を下ると間も無く、小児は海と思

つた、大きな湖を見た覺があり、また其邊に

山間の清潔な谿川に沿つて温泉宿があつて

其処に泊つた記憶もある。確か其の湖は會津

の猪苗代湖で、温泉は東山ではなかつたか

と想像げれるが、君、若松の城は東山の近

処にあるか

さうさ、御城から一里位のもんか

さうしたらうな、さうすると確かに其処だ、

それから少し小高以処に妙な五重の塔のや

うな中に這入つて漸々と廻りをのり登つて

塔の上から見晴らした事もあり、それは

榮螺塔とか覺えて居る、また池か川かに臨

んだ処に立派な寺堂があるのに參詣したか

虚空藏様と教えられて、僕の村にも有名な
 虚空藏様があるのので小児心にも連想して能
 く記憶して居る、それは柳津と思ひゆるし、
 何様しても米澤から檜原越をして會津に落
 ちたよ相違ない。さうすると其の檜原峠を
 越える時なんだが、春は君、山國では何処
 でも野や山を焼くだらう、其の山焼の萱野
 の火が林に燃え移って大變な山火事になつ
 たが、下度三人が峠を通るに間近く焼けて
 居るので、その火焰が熱くつて三人は助け
 佐けられて一生懸命、笠の縁に両手を掛け
 ながら、一里ばかりの間を漸々駆け抜けて
 休息んだが、今度は非常に咽頭が渴いて来
 たのに近邊には水も無く、困つて居ると、
 六部の父上は徳麻山には岩梨といふものがある
 筈だと言つて、道側の藪に這入つて何か探
 し初めた、暫らくすると大豆ほどの小さな
 草の實を掌に一杯採つて来て二人に分配して
 呉れたが、全然梨と同様の味で美味かつた
 のを記憶して居る、二人は慾が出てまた藪に

虚空藏様と教えられて、僕の村にも有名な
 虚空藏様があるのので小児心にも連想して能
 く記憶して居る、それは柳津と思ひゆるし、
 何様しても米澤から檜原越をして會津に落
 ちたよ相違ない。さうすると其の檜原峠を
 越える時なんだが、春は君、山國では何処
 でも野や山を焼くだらう、其の山焼の萱野
 の火が林に燃え移って大變な山火事になつ
 たが、下度三人が峠を通るに間近く焼けて
 居るので、その火焰が熱くつて三人は助け

下に下りるといふやうな、初めての者には實
 に胸が跳るほど面白かつた。
 而して其の磯馴松の松風を聞きながら、僕
 は藍の山も忘れて、毎日、海を左に歩行
 した。全然徳摩とぶろ
 と言つて潮田は、真嶋の側にある、常盤とい
 へる紙巻煙草の包みを取り擧げ、肥と其の繪
 の磯馴松をば見詰めた。

石貝殻があり、終末には珍らしくも無くなつ
 て、大概は捨て、仕舞つて唯二個三個面白
 いのばかり持つて居つた。
 而して其の海岸だが、海に沿うて霞罩めた
 磯馴松が、小児には百里もあると思
 ふほど目の届くかぎり。其の松の木の間木
 の間よりは太平洋の海面、紺青色の上を白
 帆が通る。真・倚麗な砂の上には、衝であつた
 らう、幾千となく群かつて、一度にパツと
 飛び立つかと思ふと又一度にサツと砂の上

其の海岸續き、勿来近邊でもあつたか、最
 其の海岸續き、勿来近邊でもあつたか、最
 世間は夏になつて、何日の間にか小児も
 綿入を單物に衣更へさして貰つて居つた。
 暑い中を旅して居ると、毎日々々天氣が續
 いて、雨は少とも降らぬ。或日の事、蒸
 て蒸して何日もに無以暑い日であつたが、
 海面の遠く見晴らさる、処の葦簀張の茶店
 に休息んで、二人は父上に心太など喰は
 貰つて居ると、馬を牽いた赤ら顔の老爺

夕立

(Blank page with a grid for writing)

戸外そとに繫つないだ馬むまは、荷鞍にぐらばかりで空軀からみであ
 りな老爺おやぢと思おもつた。小兒こどもには少すこく恐おそい
 は酔よが廻まはつて倍々ますます赤あかく、小兒こどもには少すこく恐おそい
 の鹽しほを者ものに舐なめて吞のみ初はじめた。其その赤あから顔かほ
 胸毛むなげを扇あふぎなから、茶碗ちawanでチビリく小皿こざら
 焼酎せうちゆ一杯ぱいぱいと言いつて、大肌脱おほはだぬぎで濫圍扇片手らんゐせんぺんてに
 の者ものであらう、親おやしげに茶店ちやんの内うちに這入はいりて
 腰掛こしかけに並ならんで居をつたが、其その馬子まがは其その近所きんじよ
 樹きに繫つないで這入はいりて来た、僕等ぼくら三人さんにんは戸外そとの
 か来きて、馬むまを其そのま、茶店ちやんの前まへの百日紅ひゃくにちべにの

ツたが、牛蠅うしばへとかいふ蠅はへが集たかるので、五月ごご
 蠅はへに絶たえず尾尾おっぽを振りながら、靴ぐつとして
 老爺おやぢを腔みつめて居をる。馬子まがは馬むまに目めを遣やつた
 が、畜生ちくせい喰くひ度たいか、今日けふは虚軀からみで疲勞つかれも
 耐たまひ、我慢がまんしろ我慢がまんしろと言いつて、自分おれ
 ばかりチビリく、飲のんで居をる。
 其その茶店ちやんの近邊きんぺんはまた、一面砂原いちめんすなはらで、屋後いしご
 に松並木まつなみぎが並ならんであるのみ、青あをい物ものとして
 芝草あしくさ一ツ無ないのであつた。
 馬子まがは不圖氣ふとけが注ついた様に、やア鳴輪なりあを何ど

凝

うとすするにも、何しろ空身の馬の汗被くば
 かり非常に暑いので、其のまゝ、其処に暫く
 休んで、沖を遥に眺めて居った。
 さうすると、太平洋遠く真黒な雲の峰が重
 なり合つて何処かの山かと思はれた、暫く
 すると、其中、**から**一塊の黒雲が剥離れて来
 た、見る間にそれが漸々と高く頭の上近く
 来て、丁度其の雲に太陽が隠れて、遽にド
 ニヨリと茶店の近邊が暗くなつた、雲脚が
 早いので又パツと明るくなるると同時に、前

様したかなアと自分の左右を見廻した其の
 周章て様といふのは無かつた。鳴輪とは彼
 の馬の手綱に通して置くものだから、何処かに
 落すか遺れでもしたのであつたらう。さう
 して今日は馬鹿に縁喜が悪いやと言つて、
 茶店の女主人を相手に、何日めやうに問屋
 に行つたのに荷物一個無かつたので、
一厘も駄賃を取れない事やら、いまの鳴
 輪の事やら、愚痴を溢して居つた。
 僕等は心太も喰ひ飽きて、其の茶店を出や

今考へると
美濃尾張
邊でいふギ
バ即ち鬪馬
と云ふのがそれ
であつたかも知
れぬ、馬の腹
髻に上下仕合
と染め抜いてあ
るのはそれと
防ぐのたさした
が、此の時は鳴輪
がさうしたといつ
たを覚えて居る

に繫つないであつた馬うまが、ヒインと其そのの雲くもを望のぞ
んで一聲ひとひら高く嘶なくと、前足まへあしを擧あげて棒立ぼうたちに
立たつたがね、馬うま子は駭おろいて周章あわててなから戸と
外とに出でた時は、馬うまはバツタリ倒たふれて仕舞まつ
た。父上おとつさんも茶店ちややの女主人おんなみせも驚おどろいて、そして
其そのの馬うまの病氣ひやうきを何なんとか言いつて居をつた。僕ぼく
は忘れて仕舞まつたが、係か一そ其そのの時ときの話はなしが小
児こども心こころにも珍めづらしく思おもつたので記憶おぼえて居をる。
、何なんでも人間にんげんには聞きこえないが雲くもの上に
天てんの馬うまとやぐ居をつて嘶なくんださうだ、さう

すると其そのの声こゑを聞きいた下界げがいの馬うまも声こゑに應こたじ
て嘶なくと其そののまゝ倒たふれるものだが、それが言いつ
つた、それで其そのの聲こゑを聞きかせまゝと紛まぎらす
為ために、彼あの鳴輪なりりんを下さげて置おくものだといふ
實まことに可笑かしく以もつて話はなしだが、兎とに角馬かくうまが一声ひとこゑ嘶ない
たまゝ、棒立ぼうたちに立たつたと思おもふと、直すぐ倒たふれ
たのは確たしかに記憶おぼえして居をる。
馬うま子こばかり氣きの毒どくであつたが、他ほかに詮せん方も
なく、父上おとつさんは唯ただ老爺おやぢを慰なぐさめながら、他ほかに
は其その處ところの茶店ちややを出でて、家いえは一軒いっけんも無なかつた

けれども 鉦を敲いて、
 たかと思ふと、海面が白く泡立って来て
 、天は遽に一パイに雲が湧き、未だ正午過
 ぎて間も無以のに夕暮のやうな逆邊の景色
 、他人の顔も分たぬまでに暗くなつたが、
 起つて俄に轟と、頭の上を轟以て坤球以外
 に鳴り収まつたのは雷であつた、さうする
 とボツリくと地を掘るやうな大粒の雨の
 飛礫、冠つた笠も傾くばかりに降つて来
 、また一層恐ろしく天地暗黒に成つたが、
 電光は明らかに並木を縫つて閃いたと思ふ
 と以前に倍して雷の声、それに雨交り一陣
 の疾風、松の葉も挨拶せんばかり、今度は
 茶店も無ければ辻堂も無以のに、夕立は唯
 々親子三人を降り沈める、仕方が無以のて
 三人は、大きな松の根方に堅まつて雨宿り
 をして居ると、颯々と鳴る風は松を拂つて
 野原の草に落ち、其の時の恐ろしさ、何様な
 るおとかと思つたが、暫くすると驟雨なも

けれども 鉦を敲いて、
 たかと思ふと、海面が白く泡立って来て
 、天は遽に一パイに雲が湧き、未だ正午過
 ぎて間も無以のに夕暮のやうな逆邊の景色
 、他人の顔も分たぬまでに暗くなつたが、
 起つて俄に轟と、頭の上を轟以て坤球以外
 に鳴り収まつたのは雷であつた、さうする
 とボツリくと地を掘るやうな大粒の雨の
 飛礫、冠つた笠も傾くばかりに降つて来
 、また一層恐ろしく天地暗黒に成つたが、
 電光は明らかに並木を縫つて閃いたと思ふ
 と以前に倍して雷の声、それに雨交り一陣
 の疾風、松の葉も挨拶せんばかり、今度は
 茶店も無ければ辻堂も無以のに、夕立は唯
 々親子三人を降り沈める、仕方が無以のて
 三人は、大きな松の根方に堅まつて雨宿り
 をして居ると、颯々と鳴る風は松を拂つて
 野原の草に落ち、其の時の恐ろしさ、何様な
 るおとかと思つたが、暫くすると驟雨なも

潮田は猶も語を續ぎて
 其の山寺といふのは何処であつたか、寺の
 後の小高いと云ふには別に御宮があつて、
 見晴らしの宜い処であつた。其の寺院の和
 尚様も父上位の年恰好で、朋友のやうに終
 夜語り合つて居つたが、互に和歌か俳諧か
 を詠み交はして居つた様に思はれる。繪も
 畫く和尚様であつたと見えて、繪具皿を出
 して来て、早速に紙袋を色彩つて、それに

盆花

んだから間も無く止んで、雲も全く晴れ、
 海道（かいたう）の松並木は雨に洗（あら）けて一層緑に、夕
 日は燦然と海を照らし、雲の峰も遠く収（あさ）
 づて、激（えき）に襟（えり）まで濡れたけれど、御（ご）却（か）つて冷（ひや）
 涼しく、松風の声、波の音に鉦鼓を合せ、
 夕日に笠を傾けながら、其の日の黄昏に或
 る山寺に辿り着いて、其の夜は其処に一夜
 を明かした

煙

た、そんな日光であつたらう

歩行ある以て、大おほきな松すぎの森もりの中なかに金碧きんぺき燦さんたる
 御宮みやや、欄干らんかんの朱塗しゆぬりの橋はしや、夏なつなほ寒さむき大
 小ちひさしの瀑布たふしを見みて、それそれから左ひだりの方はうに道みちをと
 ツて、暫しばらくの間あひだ旅たびして居をると峠たがひに差さ掛かツ
 た、其そのの峠たがひを登のぼり詰つめたと思おもふ頃ころ、右みぎ手に
 高たかく煙けむりの立たつ山やまを見み、其そのの麓ふもとの原はらを横よこぎツ
 て暫しばらく行ゆくと、確たしかに善光寺ぜんくわうじと記憶おぼえて居をる、
 彼のあの淺草あそくさの觀音堂くわんおんだうよりも大おほきかツたかと思おも
 はれる、善光寺ぜんくわうじよりは又また左ひだりに這はい入いつ、蝸かきの
 鳴なく初秋はつあきの事こと、越中えつちゆうの立山たてやまに越こえると言いツ

麥焦むぎちがひを入いれて、僕ぼくと六部ろくぶの姉あねさんさんに分わけて
 呉くれた、實まことに親切おんせつな和尚様わしやうさんであツた。それ
 から話はなす程ほどの事ことでもなない、其そのの和尚様わしやうさんの
 居間ゐまに、墨色ぼくしやく淡あはき大おほきな達磨だるまの繪ゑの軸物かきものが
 懸かツて居をツて、矢張やはら薄墨うすすみで贊さんだら、達磨だるま
 の頭あたまの上うへに字じが書かいてあツたが、其そのの達磨だるま
 の顔かほが小兒ちどもに恐おそろろろく感かんじたので、其そのの時とき
 の事ことを能よくく記憶きおくして居をる。直ただぐに右みぎ手に這はい入い
 そして其そのの山やまを下くだると、直ただぐに右みぎ手に這はい入い
 て、今度こんどは海うみの見みえなない處ところを幾いく日かも幾いく日かも

温泉のある処まで行ッたが、病氣は左程
 でも無かつたけれども旅は迎も出来な
 だ、父様は僕の看病を姉さんに任
 せて、温泉宿に置いたま、自分一人
 立山に行ッて来るから待ッて居れと
 言ッて宿を出た、姉さんは戸外に一
 歩出ずに僕の枕元に居ッて看病し
 ながら、子供二人は心細く待
 ヲツて居ると、次の日の暮れ方と思
 ヲつた父上は歸ッて来て、立山の地
 獄の話をして呉れたが、劔の山が
 ある事やら、山の上に火が燃えて
 居る事やら、血の池や賽の河原の事
 まで話して、悪心事を為たものは
 皆其の地獄に落るのだと聞かされて、
 二人は道みち蜻蛉を捕ッたり、蝶々
 を追ッたりした事も恐ろしくなり、
 己後蟻一足殺すまゝと小児心にも
 観念した。

始終習ッて居るのを、僕も後には
 門前の小僧で、知らず識らず暗記
 たのを、其の晩は地獄の事が恐ろ
 しく、妙法蓮華經觀世音菩薩

始終習ッて居るのを、僕も後には
 門前の小僧で、知らず識らず暗記
 たのを、其の晩は地獄の事が恐ろ
 しく、妙法蓮華經觀世音菩薩

始終習ッて居るのを、僕も後には
 門前の小僧で、知らず識らず暗記
 たのを、其の晩は地獄の事が恐ろ
 しく、妙法蓮華經觀世音菩薩

流奔瀬にして柱も建てる事の出来な処に、
 大索を張って岸に架し、籃を懸けて行人を
 渡す処があつたが、父上は後に子供等二人
 は先に一ツ籃に乗せられ、恐ろしさに蹲く
 まり、腕り抱き合つて向ふの岸に着いた事も
 ある。神通川の水上飛弾と越中の境あたり
 に籃の渡といふのがあり、聞ひし事がある
 が、それであつたかと思ふ。
 其の邊は北國の事、朝夕は單物では少し寒
 さを感じずる程であつた、父上のいふには

觀音經

薩普門品第二十五、爾時無盡意菩薩、即從
 座起、偏袒右肩、合掌向佛、而作是言、世
 尊、觀世音菩薩、以何因緣、名觀世音、佛
 告無盡意菩薩、善男子、若有無量、百千萬
 億衆生、受諸苦惱、聞是觀世音菩薩、一心
 稱名、觀世音菩薩、即時觀其音聲、皆得解
 脫、**と寝ながら口の内に稱念をながら寝た。**
 其処の温泉には四五日も滞留したか、僕
 の病氣も全く癒り再び旅に出たが、其の近所
 であつたと思ふ、懸崖絶壁數十丈、下は急

不能以惡眼視之、况復加害、**又**普門品を誦
 いたがら、戀しむ母の死靈の供養の爲と玉
 くしげ、二人の孤兒は甲斐々々しく、秋野
 の色を東に、して小腕に抱へ込んだが、其処
 は飛彈か越中か、何処であつたか

今日、盃蘭盆の十五日だから、母様の供
 養の爲に此処の尊と以、寺に納めるから、
 お前達二人で盆花を採れと言つて、僕等を
 廣以、野原に連れて行つて野の花を採らした
 が、尾花に交る女郎花、桔梗、萱、そ
 て大和撫子もあつた、背丈に餘る萱を**分け**
 分け、若復有人、臨當被害、稱觀世音菩
 薩名者、彼所執刀杖、尋段々壞、而得解脫
 、若三千大千国土、湍中夜叉羅刹、欲來惱
 人、聞其稱觀世音菩薩名者、是諸惡鬼、尚

一里餘りも山に登ったかと思ふと、山道も
 バツタリ其処にて行き詰りになつて行手を
 高く仰ぎ見ると、今度は疊々たる巖山で、
 迎も大人でも上れる処では無かつた、それ
 で親子二人は何様しても此方へ来な以事は
 小児でも想像される、サア元に引き返すに
 は全然日が暮れる、また麓に着いたところ
 で其処に親子が待ツてる事やら、小児は山
 に登ったと思つて呉れ、ば宜い、が多分里
 の方に行つた事と思つて其方に行つたに相

道に足に任せて覺束なくも山越したか、遠近
 には名も知らぬ呼子鳥の聞ゆるのみ何処ま
 で行つても親子に遇はず、日は漸々と暮れ
 かり、山の中腹より谿間に沿うて地を這
 ふ細き流れの音は、サラくと木枯の風に
 通ひ、其の淋しさと言つたら、小児は泣く
 にも泣かれず時々立ち留まつては露千やん
 露千やんと呼ぶと、訝に響く山彦の吾が聲
 ながら恐ろしく、暗くなつては大變と思つ
 たから一生懸命、喘ぎあへず、疲勞も忘れて

にも鮮明に見え、僕は其時恐心とも思はな
 かつたのも不思議であるが、其儘惘然して
 居ると、その山姥は何時の間にか小児の側
 に来たものと見え、緊り裸身に抱かれて居ッ
 て、山姥の乳汁でも飲んだのか、御飯も食べ
 なかつたために腹も減らず、身はあれ春の暖
 く夢軽くして花の園生の胡蝶の如く、母死
 してより正に三百日小児は再び慈愛の懷に
 眠つた。そして其の次の日か山姥に送られ
 て山を降つた様に記憶して居るが、何日か又

るに落居て潮田は更に言葉を續き、
 〆〆〆て其の女は裸體といふぢや、肩や腰の
 邊に葛蔓の如きものを纏ひ、蓬の髪を振り
 亂して顔色は海棠の如く、鼻隆く口大きく
 目は長く切れ上り、小児を見て嬉しげに
 莞爾として、年の項はさう、四十ばかりの
 大年増、風は颯として葛蔓は翻へり、燦た
 る北斗の光芒の下に足を側たて、半月を踏
 む其の凄壯、神が魔か、向ふの山に腰かけ
 て間凡そ一町餘りも隔て、居るのに夜の色

長い顔に

最もももいつつかか紫山子も用な無くなり、引板の鳴なる
 子も音な無くなつて、僕は家を出でる時き着きて出で
 た着物のに衣を更かへされて居をつたくらる、朝あ晩ばん
 は人の呼い息きを見みるまでに旅たの天そは寒さくなつ
 た。右みに海うを望のぞむ突つ出でた土地せの巖山い、其そ
 の岩山いの処ところ々々に寺院だの澤山たある倚よ麗れな山やに
 登のぼつて、小見こにも景色けの宜よい山やだと思おもつた、
 其その山やを下くだると海岸かの繁華はんな所まに出で、それ
 より海上かい三里さんばかり船ふねにて向むかふの岸きに着つ

仙境

里さとに出でて六部ろくぶ親子おやこと一いっ緒しょにななつて居をつた。
 僕ぼくは山姥やまうばといふけれとも何なにものであつたか
 此この時とき直ち嶋じまは何なにか言いはれりがたが津つ路ろのまま
 やが十じ年ねんて作し業わざわたた。

渡る雁に、慄然俄に寒さを感じて小首を擧
 げ、遙に天を見渡せば、赤々と山の端近く
 沈み行く太陽の前を、雁は一列になつて渡
 ったが僕は春、姉と共に村の山に登つたと
 き見た雁と同じのが戻つて来たのだと小見
 心に思つた。
 其邊は能登の國で、石動山より七尾に出、
 七尾より船にて和倉に着き、其の海岸にて
 松露を採つたのだらうと思ふが、それから
 後は方向を轉じ山から山と深山に這入り、

た、其処には温泉があつて二三日滞留し
 、それより海岸に沿つて行くと、海面が木
 の間遠く見申る処であつたが松並木、いや
 並木といふより柵林に近処所に処々楓も
 参差て、海に注ぐ小川の流は清く岩にせか
 れ、秋風は松の梢にむせんで笠さる
 以程に思はれた、六部の姉さんは零餘子の
 それの大ききなる松露を木の間に見出して
 、三人は前に進み、後を見却り、三人して
 一個の笠に盛れるとき、カリ〜と北より

頭筋も寒

仙境は何処であつたか
 冬近き山の峽は寂寞として静肅に、
 たが、見馴れな小児には却つて恐
 人を恐れずして鹿が三足ばかり遊んで居つ
 を得て三軒ばかり人家があつた、庭には
 は錦の中に包まれた、其の谿間には高低処
 谿河の水底まで日に燃えて墨染の六部親子
 び谿間に一里も下ると湍山の紅葉霜深く、
 もの二三里も松の繁れる峰を越えて、再

言ふとき、遠く利根の川面を緩く漕ぐ船
 の船歌艦聲に和して聞かえしかば、潮田は話
 を止め、眼を閉ぢ耳を澄まして聞き惚れつ
 七歳の童十歳の女児に供をけられて、
 と獨言のやうに口吟み、聴て聲張り上げ
 別る、に忍びず還つて相隨ふ、相隨つて還
 々として仙城を訪ふ、三十六曲水廻り縈る
 一溪初めて入れば千花明かに、萬壑度り
 盡く松風の聲
 悲壯の声に吟了り

悲しき秋も過ぎて、
 蚯蚓の声も弱りゆく
 であつたから北國のやうに
 とも、落氷の水嵩増すなる
 霰聞く旅の宿は冷かつた
 の霜を踏んで残月をながむ
 早行の朝なんどは薄氷張れる
 氷を碎いて朝浄め、小さき
 ある。左右して小見の僕は水
 左に洗つた事も六部

除夜

言ひ、其の當時の旅の情は
 全然恁麼であつた
 と言はば、真嶋も直に語を
 續ぎて行以て北涼に
 輪を摧以て道はず羊腸の
 苦、行以て北涼に
 来れば歲月深し
 と胸を抱以て朗かに和したり
 し、水底の魚も躍
 るべく、近邊の光景寂として
 真菰の中の花
 萱蒲ひとり笑を洩らせり。

何様なツたかと現今でも絶えず思ひ浮むの
 で、僕は平常に情は浮かぬ、沈鬱勝の性質
 も一ツは母様の無以爲でもあらうが、一ツ
 はそれから起つた事と思ふ。されば飛花落
 葉は言はずもあれ、僕は漸く七歳の時、已
 に冬の田の落し水にも哀を知つた
 と、親友一人前においで、當時を懐ふ顔悲し
 く、誰れに向つて言ふともなく悵然として言
 ひ放てり。
 それから漸々山笑ひ、鐘かすむ頃となつ

唯到るとおる恐く、尨犬に吠えられ、醜
 き姫の其の腕白の子を叱るにも、大人しか
 らぬばいまの六部に呉れて遣るとは度々聞
 いた語で、僕は子供心にも己が境涯の情な
 事、事に思つて是も母様の無以爲のみ思ひ
 六んだ。
 世の哀といふものは、慈といふものを知つ
 てからなご言ひ慣はすのに、僕は不幸に
 も慈より先に哀を知つた。それに其の六部
 親子と其の年の夏離別てから、二人は其後

たうへに、小見の濡れた衣服を持たされて
 寒さうに後から附いて来るのを、僕は背中
 の上から振向いて見れば、小見心にも氣の
 毒な思ひがした。 **跟**
 九様斯様して西京、奈良、吉野と山に登り
 里に降り、那智や熊野は何様であつたか、
 紀州は高野山に上つた、高野山は能く山の
 名を聞かされたので記憶して居るが、唯杉の
 木立のある薄暗い御山とばかり覚えて居る
 山を下りると海に出たが直ぐに船で向ふ

たが、未だ比良か何処かの高嶺には真白に
 雪が見えて、夕暮の寒風には馬蹄の跡が
 再び凍る頃であつた、僕は野に立てる地蔵
 様に捧げる積りで野河の岸に咲いてをる狗
 子楊を取らうとして誤つて川に落ちた、と
 にかく父様に引揚げて貰つたが、ツブ濡
 れに濡れたもんだから、寒風の吹く野原の
 中で着物を脱がされて、六部の姉さんの着
 物一枚を斜いで着せられ、父様の背中に被
 負つたが、六部の姉さんは着物一枚斜がれ

良に這入り、伊賀越をして伊勢に參詣した
 ものと見え、途中山谷皆梅林、下度花の盛
 り確に月ヶ瀬。伊勢に參詣してからは東海
 道を真直に歸つて、東京より下総を経て、鹿
 島參詣の積りず、**下**もあつて此地に來たのに
 相違な^らい。
 さうすると、京阪の名所は大半見たのであ
 るだらうが、**下**度其時は霜枯の寂寞、**節**に
 旅したのて、心も自然林々何見ても面白
 く感じなかつたものと見え、舞子や吉野と

戸より大阪と歩行して、大阪よりは再び奈
 の方に渡つて赤穂・姫路・明石・須磨・神
 で徳島より讃州琴平の方向に行き、また岡山
 漸く其當時の道筋が能く判つて來る、それ
 付かなかつたが、現在潮來を見て考へると
 ツたのか、何様歸つたのか少ツとも想像が
 今までは全然方角が不分別、何処に何様行
 の東京近くにあるとは知らなかつたので、
 徳島にでも行つたものと見える。徳摩水村
 に渡つたから、和歌の浦あたりから阿波の
 徳島にでも行つたものと見える。徳摩水村

十

東海道は霞たなびく長閑な春の日を旅した
 ので、東風暖く、菜の葉の蝶の羽軽く、旅
 の子は桃の酒、蓬の銚の馳走は魚くとも
 六部の姉さんの手機用に、歩行しながら紙
 雛を拵て三月の節句は面白かつた。
 後の宿に桃を見、先の驛に櫻を眺め、千里
 鶯に送られて雲雀鳴く頃の卯月八日は何処
 であつたか、松原遠く海近きとあつたか
 たから、三保の清見寺でもあつたか知れぬ

東海道

いふやうな所は少しも記憶がな
 山

山ルネでありたらうと思おもふ、其その下の湖みづうみには富とみ
 士の山やまが倒たふに寫うつつて居ゐつた。
 そして其その處ところの温泉おんせんに旅たびの垢あかを落おし、夏なつの初はつ
 めの衣ころも更かへして老らう鷲じゆを聞きき捨すてに、新あらた緑きりの
 山やまを降くだつて小田原おだわらの海うみに出いで、小見こゝろには鳴な
 立た澤さわの哀あはれは知しらなにか、大磯おほいそ小磯こいその浪なみ打うち際ぎは
 を江えの島しま、鎌倉かまくらより金澤かなざは、河崎かはさきの大師おほし河原かはら
 に参まゐ詣げし、大森おほもり邊へにて麥むぎ藁わら笛ふえを吹ふいた事ことま
 で浮うかんで來くる。
 東京とうきやうは五月ごがつ雨あめ時とき、合羽あつぱは小田原おだわら所ところで、も買か

道みち路ぢより老おに高たかく登のぼつて、子こ供ども等らは態おどろ々
 旅たび草鞋わらじを脱ぬぎ、寺てらに上あつて誕生たんじやう佛ぶつに甘茶あまぢやを
 灌かけて、灌佛くわんぶつ會えを濟すました事こともある。
 それから間まもなく山やまに差さ掛かつて頂上ちやうじやうに湖うみを
 見みた、其その湖うみの澗まの篠竹しのたけを分わけて又また高たかく山やま
 に登のぼり、燒山やけやまの土つち赤あかく、烟けむり白しろく立たちのぼる
 所ところを見みて此こゝ處ところも矢や張はりり地ち獄じやくだと言いはれたが
 澤山たくさん頭あたまの無な以い地ち藏ざう様さまや、矢やたらに石いしを積つ
 み重ねかねてあつて、其その處ところより非ひ常じやうに深ふかい谷たにを
 見み下くだる一ひとた記憶おぼえがあるが、考かんがへると箱根はこねの
 十じゆ二に

は實に不思議だ、其のくせ毎日この五月
 雨に、江戸川がそれとも利根でもあつた
 のか、其の大河の縁の卯の花垣の小家が二
 三軒、危あぶく流れさうであつたのまでおぼ
 えて居る。
 それから此方に来たのだか、其の頃は五月
 雨も金あつたく晴れて、夏の日に暑かつたが僕は
 繪の書かつた子供持もの小ちひな扇あふぎを買かつて貰もらつ
 て嬉うれしかつた。其の時途中歩ありながら、
 祐たすけ天上人てんじやうじんの幼こ立たの話を父上おやじさんから聞きいて、此

ッたか何様だか、見たりは相違ちがひだらう
 が、上野じやうのも浅草あさくさも少ちつとも記憶おぼえが無ない、唯
 兩國りやうごくが永代えいたいか大おほきな橋はしを見みたのと、それが
 ら見世物みせもの小屋こやを父上おやじさんが親切おんせつに見みせて呉くれる
 のに、小屋こやの前の看板かんばんに出でて居をる人形にんぎやうが並なみ
 の人程ひとほどに大おほきいのが氣味きみ悪わるく、僕ぼくは何様どうし
 ても這入はづららなもので、三人さんにんとも其処そこを素通すどほ
 りに、た記憶おぼえがある、それは多分たぶん浅草あさくさであ
 ったらうと思おもはれる、だた其その他ほかには東京とうきやうら
 しいと思おもふ事は何なんにも記憶おぼえして居をらなもので
 十
二

の寺院だといふのに参詣したか、それは成
 田の不動様であつたらう。湖、印幡沼であつたらう、
 それから大湖、印幡沼であつたらう、
 その縁を通つて漸々此方に来たが、
 いひつ、潮田は香取の森を指ざして、
 彼の香取の森から此処を見下ろしたものと
 見える、今朝のやりに潮来の稲荷山から見
 たのては無以、下度現今の節、徳、真青に
 涼しいやうな景色を見た。そして渡船で此
 処を渡つたのか、彼の十二の橋の下を通つ
 て潮来の方に上陸つたやうに思ふ。
 それから遂々此の近所で六部親子に剝離れ
 、それなりに再び遇はずに仕舞つたが、死
 んだ母も實際の妙も忘る、ましてに馴染んだ親
 子と生離別した土地であるから、いつも此
 処のみ思ひ出して水陸ともに忘れずに居つ
 て、不圖も現在此の土地に来て見れば、二
 十年前も昨日の如く、一樹一草も昔のまゝ、
 なるに言ひ得て
 後は不得言潮田は、
 潜然七首を擧げ、心

の寺院だといふのに参詣したか、それは成
 田の不動様であつたらう。湖、印幡沼であつたらう、
 それから大湖、印幡沼であつたらう、
 その縁を通つて漸々此方に来たが、
 いひつ、潮田は香取の森を指ざして、
 彼の香取の森から此処を見下ろしたものと
 見える、今朝のやりに潮来の稲荷山から見
 たのては無以、下度現今の節、徳、真青に
 涼しいやうな景色を見た。そして渡船で此
 処を渡つたのか、彼の十二の橋の下を通つ
 て潮来の方に上陸つたやうに思ふ。
 それから遂々此の近所で六部親子に剝離れ
 、それなりに再び遇はずに仕舞つたが、死
 んだ母も實際の妙も忘る、ましてに馴染んだ親
 子と生離別した土地であるから、いつも此
 処のみ思ひ出して水陸ともに忘れずに居つ
 て、不圖も現在此の土地に来て見れば、二
 十年前も昨日の如く、一樹一草も昔のまゝ、
 なるに言ひ得て
 後は不得言潮田は、
 潜然七首を擧げ、心

凡て五官の刺戟るとする、眼に其の形を視る
 や、耳にその声を聴くや、神経の過敏なる者
 は精神の宿るなる大脳細胞の運動、迅速且つ
 鋭利にして、現在に視てもつて直に遠く未来
 も豫知する能力のあると共に、一方には即座
 に吾も識らぬ瞬間に遠く過去と隔たりて、
 ておそ一物を二個にも、或は現今を往昔に思
 ひ分つにやなご潮田の考へ及ぶとき、真島は
 月見る瞳を朋友に轉じて、



離別

やと考ふると共に、不思議の感に打たれて其
 の何が故なるやを、暫時は言葉なくして考へ
 たりき。
 真島も
 月、
 湖上風清く、月涼しき夏の夜
 の風情に酔へるが如く現し心なくなりて、其
 の朋友の話を忘るともなく黙然たりしかば、
 波底更に月ありて船中却て語絶えたり。

御宮おみやに参詣さんげいして後のちのこと、畑はたけか曠野あらのか忘れ
 たが其処そのとに来きかゝると、六部むくの娘むすめの子こは旅たび
 の暑あつさにでも中ちゆうつたのか其以前そのまへより下痢はらくたを
 して居をつたのが、生憎あいにく其野そのので腹痛はらうづみをして苦くる
 み出した、阿父おとつさん様は以前まへの村むらに戻もどつて薬種くすり
 を買かつて来くるから二人ふたりは此処こゝに待まつて居をれ
 といつて引返ひっかへした、僕ぼくは小兒こどものことなり者かん
 病びやうも出来できずに唯眉ただまゆを擧ひそめて見みて居をるのみ、
 尾籠びろうの話はなしだか女をんなの子こは度々たびたび便所べんごよに行いきたく
 なるので、又また野のの聖せい隠いんに這入はいつた、僕ぼくは其その

此処こゝで六部むくと別わかれたといふのは何様どうしてか
 、國元くにもとから迎むかへても来きたのか、それとも其その
 六部むくに捨すてられでもしたのか其後そのあとは何様どうし
 たか、
 既に過すぎ去さりし事ことの今際いまはの如ごとく、其朋友そのとも
 の身みの氣遣きづかはしく、眉まゆを擧ひそめて問とひ正ただせり。
 否いや、國くにから迎むかへも来きない、況まして第二だいにの父ちち
 とも妙あまとも思おもふべき情なさけある親子おやこは、無慙むざんに
 小兒こどもを捨すてやうは無ない、それは何なんでも此邊こゝ
 近くちかくの事ことであつた杉すぎの木立たちの澤山たくさんある処ところの
 可か

巡めぐりたが泣なみ声こゑも出でなかつた、今いま度は速はやくに
 返へん言ごがなない。若もしや中なかには居ゐ無ないのではあ
 るままいかと氣きが注ついで、露つゆちやんてばなアと泣な声こゑに呼よびながら、
 恐おそるく雪ゆき隠かくの暖ぬる簾れんになつて居ゐる簾れんを明あけ
 ると、中なかは真ま闇くら、僕ぼくは棟むね然ぜんとして思おもはず透とお
 心こゝろ遣やり大おほ声こゑに、姉ねえさんや姉ねえさんと呼よんでも
 後うしろ見みらるる逢あ魔まが時とき、俄にわかに淋さびしく感かんじて
 を採とつて来きたよと誇ほこ顔がほに言いつてみても雪せつ隠かく
 の中なかでは黙だまつて居ゐる。漸だん々ぜん日ひが暮くれか、ツ
 て後うしろ見みらるる逢あ魔まが時とき、俄にわかに淋さびしく感かんじて
 心こゝろ遣やり大おほ声こゑに、姉ねえさんや姉ねえさんと呼よんでも
 返へん言ごがなない。若もしや中なかには居ゐ無ないのではあ
 るままいかと氣きが注ついで、露つゆちやんてばなアと泣な声こゑに呼よびながら、
 恐おそるく雪ゆき隠かくの暖ぬる簾れんになつて居ゐる簾れんを明あけ
 ると、中なかは真ま闇くら、僕ぼくは棟むね然ぜんとして思おもはず透とお
 心こゝろ遣やり大おほ声こゑに、姉ねえさんや姉ねえさんと呼よんでも
 後うしろ見みらるる逢あ魔まが時とき、俄にわかに淋さびしく感かんじて
 を採とつて来きたよと誇ほこ顔がほに言いつてみても雪せつ隠かく

儘ま待まちつて居ゐるうち、道みち路ぢの傍かたはらの藪やぶの中なかに莓いちじ
 を見み出いだした、それを一ひと粒つぶとり二ふた粒つぶ掬くぎりて
 藪やぶを潜ひそり、漸だん々ぜん丘かみの上うへに登のぼつたが、丘かみ
 の蔭かげには澤たくさん山な生なつて居ゐるので嬉うれしく思おもつて
 、病びやう氣き後ご飯ひも喰くはないで居ゐる姉ねえさんに採とつ
 て行いつて遣やらうと、日ひの暮くるをも識しらず
 に時ときを移うつして西しやうの袂たもとに取とつて、元もとの処ところに帰かへ
 っで見みると六ろく部ぶの姉ねえさんは未まだ雪せつ隠かくから出で
 て居ゐらない、僕ぼくは暢のん氣きに暫しばらく其その処ところに立た盡つく
 て居ゐつても出でて来きないから、試あみまに姉ねえさん、莓いちじ
 を見み出いだした、それを一ひと粒つぶとり二ふた粒つぶ掬くぎりて
 藪やぶを潜ひそり、漸だん々ぜん丘かみの上うへに登のぼつたが、丘かみ
 の蔭かげには澤たくさん山な生なつて居ゐるので嬉うれしく思おもつて
 、病びやう氣き後ご飯ひも喰くはないで居ゐる姉ねえさんに採とつ
 て行いつて遣やらうと、日ひの暮くるをも識しらず
 に時ときを移うつして西しやうの袂たもとに取とつて、元もとの処ところに帰かへ
 っで見みると六ろく部ぶの姉ねえさんは未まだ雪せつ隠かくから出で
 て居ゐらない、僕ぼくは暢のん氣きに暫しばらく其その処ところに立た盡つく
 て居ゐつても出でて来きないから、試あみまに姉ねえさん、莓いちじ

阿父様おとつせんの薬種くすり買かひに行いつた方はうに牽ひ以ひて行いく
 から、其方そつちに行いけば阿父様おとつせんに遇あはれる事ことと
 安心あんしんして、泣なき止やんで馬むまに乗のつて行いくと、
 問屋とみやの様やうな大おほきな家いへの前まへに下おろされた、老お
 爺やぢは家うちに這はい入いつて僕ぼくの事ことに付つ以ひて何なにか話はなし
 て居をつたが、其処そこの問屋とみやの主人あるじぢぢもあつ
 たらう禿頭はげあたまの親仁おやぢが出でて来きて、種々さまざま問とひ正ただ
 された、小兒こどもの片言かたことは少ちつとも要領やうりやうを得えな
 かつたらうけれども、守袋まもりぶくろでも見みたものか
 國元くにもとが判わかつて郵便いゆうびんでも問合とひあはせたものと見み

向むかつて呼よんで見みたが近邊あきりにも返言へんげが無ない。
 係かゝり先刻さつき薬種くすり買かひに行いつた阿父様おとつせんも帰かへつて
 来きさうなものと、心持こころたのみに待まつて居をつても
 倍々ますます暗くらくなるばかり、何時いつまで待まつても帰かへ
 ッて来きな以ひ。夕暮ゆふぐれの野原のせらに一人ひとりぼつち、僕ぼく
 は心細こころほそくなつてシクシク泣なきに泣な以ひて居をる
 と、前途あきの方はうから鳴輪なりわの音おとが聞きこえて、馬ま
 子歌こたをうたひながら馬むまを牽ひ以ひた老爺おやぢが来きた
 、日暮ひぐれに泣な以ひて居をる小兒こどもを見みて、親切おんせつに問と
 ひ慰なぐさめながら馬むまに乗のせて呉くれて、其儘そのまゝ馬むまを

世々

寝かされて、明け易き短夜を無邪氣にも眠
 ったが、其時實に哀に悲し以夢を見た。他
 人の夢を聴かされては恐ろしと言つても
 面白といつても、悉皆無興く思はれる
 ものだが其の積りで聞き給へ。それは何で
 も其の苺を取つた処のやうな最つと廣以
 遼たる野原に、僕は旅の装で一人ばかり立
 て居ると、其処より前の方一段低く、ズツ
 と見渡さる、遠いところに向ふ岸も見えぬ
 波もな海か湖か、あつて、此方の岸に唯

曠

え、遂々其処から驛送りにされて故郷に帰
 ったきり、六部親子とは再び遇はずに仕舞
 った。現今考へると、小児が夢中になつて丘の蔭
 に菫を取つて居る中に、女の子は雪隠から
 出て、其処へ阿父様が戻つて来ても僕は居
 無以のて、前途に行つたものと思ひ、小児
 の跡追ふ積りで急いで其処を立去つたもの
 と思はれる。其夜、僕はその問屋の、夏のおと板の間に

く、僕は苛急にあせつて追ひ驅けやうとす
 ると、身後の方で保、保と呼ぶ者がある、
 振り向いて見ると國元の妙が居つて、其方
 には遠く高以処に藍色の山が見え、妙は春
 の山に巖を採りに行つた時の装で漸々山の
 方に行く、妙さん何と聞くと、此方を振り
 向いて保ちゃんは何母様の処に行かな以の
 と一言いつたきり、行かなければ行かな以
 ても宜以、妙さん一人で行くからお前は六
 部の子の方と一緒に行くとも何様とも勝手

一艘の小舟が繫以てある、其方に鉦を敲
 ながら後影寂寥しく、少一拗戻たといふ風
 で笠を冠つた六部の妙さんが一人ぼつち、
 その小舟に乗る氣かとぼくと行く、それ
 が唯何となく哀れに感ぜられ、それに僕が
 情なく見捨るやうな氣がして、氣の毒に思
 つて一緒に行くから待つてお呉れ、待つて
 お呉れと呼ぶと声が出な以て、其声が自分
 にばかり聞おえるやうな氣がして、六部の
 妙さんは振り向きもせず後影薄く漸々行

其処の問屋には國元と手紙の往復するうち
 泊つて居つたものか、暫く滞留の後傳馬で
 驛送りになつて、常陸から下野、磐城の一
 角白河を経て岩代に入り、東山道を羽前の
 置賜。

その途中の事は不思議に何にも記憶して
 居らぬ、唯傳馬に乗せられては次の驛に着
 以て泊るばかり、親切な六部親子は居無
 から唯夏の夕の蚊遣火鬱悒く、海も山も無



歸郷

が、悉皆潰れて袂は濡れて血に染つた。
 いまの夢といひ目も冴えて、蚊帳越しに遠
 く縁側を見ると、有明の燈火が光弱く點つ
 居つて、邊に人は無く、辻堂に泊つても何
 時も三人で楽しく寝たのにと種々小胸に浮
 んで、再び眠られずに居ると間も鶏が啼以
 て、直ぐと夜が明けた山

をした事
と見え

なかつたが、馬から下りて、姉に手を引かれ、
 姉は何で泣くのか、小児には其意味が判別
 に當て、唯歎歎あげのみにあつた。
 僕の顔を見ると、何にも言葉なく、両袖を顔
 来て、嬉しさに、小走り、急いで来たが、
 保は帰つたと門の所から叔父に呼び掛けら
 ば、せし事、年齢よりは長けて見えた。
 俯向いて居つたが、弟の家出に幾十の物思
 外に迎火を焚いて、横顔白く物思は、氣に
 くと先づ高燈籠が珍らしく、姉は夕暮の戸
 外に迎火を焚いて、横顔白く物思は、氣に

下度盆の十三日、靈迎の晩、家の門まで行
 かつた。
 有繫に故郷の懐かしく、早く姉にも會ひた
 は自分の村ながら少し志れた様であつたが
 迎に来て呉れたが、村の入口に這入つた時
 國境か何処かまで、叔父に當る親戚の者が
 部親子の慕はしく、少なき袂は、涙に朽ちた。
 の肯分があつたけれども、それでも始終六
 なく、僕は小児心にも故郷に歸るといふ事
 以那須野のやうな処ばかりで、少とも面白く

て家に這入ッても、姉は始終泣いて居るの
 で、他の家にも行ッた様な思ひがした。
 座敷には盆會の精霊棚が飾ッてあッて、桔
 梗、川萱、女郎花などの盆花、林檎、真桑
 瓜、鬼灯まで珍らしく、小児の欲し物ば
 かりであッたが、姉が斜以て呉れる真桑瓜
 も、麻幹の箸の素麵も、何だか僕も胸一杯
 になッて喰はれなかつた。
 家内が無人なので、親戚の女が一人留守居
 に来て居り、以前からの老僕と、迎に来て

呉れた叔父と其晩は都合五人になッたが、
 阿祖母様が見えなもので聞くと、阿祖母様
 は阿母様と一緒に靈棚に居る、今年あとしの春はる街
 彼岸前、風邪の心持で死去なッたからま禮拜
 で来といふ。弟の行方が知れず、阿祖母
 様は死ぬ、其間の姉の意、姉といッても僅
 に十一歳、甚麼に心配した事かと赤き林檎
 も欲しく無かつた。
 それから一日経ち、二日去り、盆も過ぎて
 秋の半ななば村の小学校に入校したが、他の

て家に這入ッても、姉は始終泣いて居るの
 で、他の家にも行ッた様な思ひがした。
 座敷には盆會の精霊棚が飾ッてあッて、桔
 梗、川萱、女郎花などの盆花、林檎、真桑
 瓜、鬼灯まで珍らしく、小児の欲し物ば
 かりであッたが、姉が斜以て呉れる真桑瓜
 も、麻幹の箸の素麵も、何だか僕も胸一杯
 になッて喰はれなかつた。
 家内が無人なので、親戚の女が一人留守居
 に来て居り、以前からの老僕と、迎に来て

まで、に僕ぼくの身みにとつて別に風雨あめかぜも無なかつた
 が、二十にじゅう年来ねんらい一日いちにちの如ごとく忘わすれなかつたは
 其その六む部ぶ親子おやこ、離わか別れた土地とちは何どこ処こであつたか
 土地とちばかりも知しり度たいと、心こころ中に刻きざんで居を
 ったのが今日こんにち目ま今いま、悠かうして其その土地とちに邂逅かいご
 して朋友ともだちと共ともに面白おもしろく船遊ふなあそびをして居をるの
 に、父ちちとも姉あねとも敬うやまふべき親子おやこの生なま死しも識し
 らずして、一ひと生ま廻めぐり合あふ事ことも出来できなかつた
 思おもへば僕ぼくは實じつに惆たん恨げんの情なさけに堪たな
 と言いつて、潮田うしほだは悵あや然ぜんとして頭かぶを垂たれ手てを拱こまぬ

子供こども等はら面白おもしろさうに狂くるひ遊あそぶのに、僕ぼくは六む
 部ぶ親子おやこの事ことを思おもひ出だしたり、その當とき時ときの旅たび
 の状さまなどを考かんがへたり、小兒こどもに似に合あはず始はじ終まつ
 憂鬱ふさふさ勝かちであつた。そして六む部ぶさへ通とほると、
 若しくやと思おもつて奔はしり寄よつて、笠かさを覗のぞき込こむ
 のが平つ常ねであつた。
 僕ぼくは十五ごじゅうご歳の春はる、姉あねは十八じゅうはち歳さいで他よそ家やに嫁よめ入い
 すると同時どうじに山形やまがたの尋常じんじょう中ちゅう学がくに入い学がくするや
 うになつて、卒業そつげふすると今こん度どは仙臺せんたいの高等こうとう
 学校がっこう、其その処こを出でると赤門あかもんの文ぶん科か、其その間あひだ現いま今
 九

きたり。朋友の情を慰めかねてや真島も共に
 黙然として目を屢瞬くのみ。
 語り続けし永き物語も爰に全く盡き、二人は
 唯惆悵として遠く目を送れば、星稀き夜の月
 のみ高く、氷輪徒に愁人を照らし、園部川の
 河岸に鰻子を捕るなる漁火の、螢と共に見ゆ
 る頃、二人は船に掉さして宿に歸り、夕餉の
 食に思ひ起せば、今日の話に耽りつ、晝餉の
 の食も忘れたるなりけり。
 蝙蝠の飛び交はす夕暮の門に納涼すなる、土

地の壯伎の節をかき、潮来曲となん言へる
 を聞けば、
 さまよ鹿島に神あるならば
 逢せたまへや以ま一度
 唯これ一個の俗謡なれども、潮田保が現在の
 情の懐なるをや。

鹿島詣

一昨日の夜の眠りかねて、係も昨日終日の物
 語に疲勞れ、潮田は、昨夜は唯昏々として
 眠り、今朝は日高くなりて起き出でたるに、
 哀ふかき朋友の話に精神を痛めたる真島健三
 は、今日は甚く咳嗽出で、少しく咯血さへ見
 え、病患の枕の攀らざれば、潮田は心配して
 醫師の許に奔りて満村先生を迎へ来り、鼎座
 となれる三人は今日もまた、真島の枕頭に
 昨日の物語の梗概を一循して其奇遇を感歎せ

唯見る屋前には漫々たる水を扣へ屋後は幽
 篋影深く、環堵蕭然あたり閑寂に、かたの如
 く細小なる草庵ありて、窗よりは胸廓の上の
 現出れたる年配耳順近くもやあらん、維摩
 の如く端然と行ひ澄ませる老比丘ありて、余
 を忘れて瞳を凝らせる潮田は、不圖その老僧
 の六部の親よりとありしを覺ると同時に吾に
 復れば、真島が手になる正なき繪にてそあり
 き。

然迄にはあらざりし疾病の次の日は爽快にな

病氣は驚怖くまでにはあらざり志かど、今日
 は昨日より少く暑くて、その逍遙も便よから
 ず、されば潮田は朋友の音護をかねて、此の
 一日は閑寂に旅舎に暮したりき。
 四五日以前寫生し来れるものは是れなるべ
 し、居間の襖に留針もて張り置ける畫の、一
 昨日は夜に入りて此宿に來り、昨日は朝早く
 より船遊びくたれば晝はあらず、今日音護の
 かたはら徒然になす事もなく熟々と熟視たる

に賢きや。往昔の吾が生死の境も識らず、足	山の色たる事を居ながらに覺れる身の何が故	現今の吾が幽明道異を識り、藍色の遠	となりて門に立ちし事の何が故に鼻をか。	何が故に尊きか、往昔の吾が乞食の六部の供	現今の吾が業率えて學の道の位を得たる身の	懐へりとは吾が現在の情なる哉。	するに帳として歸るを忘る、惟極浦に寝ても	を訪へば、心飛揚して浩蕩、日將に暮れんと	ツて歩むおと遅々、獨後れ来ツて今更に崑崙
----------------------	----------------------	-------------------	---------------------	----------------------	----------------------	-----------------	----------------------	----------------------	----------------------

只圈内に處して終に天を見ず、路を險難に要	ふを忘れし如く、	吾徒に生意付きて千里に笈を負ひ、岐路に泣	情をば強ひても需むる事の得べき。	に倦けり、然も何れの時か其生命ある暖かき	愚にも勤め學びて死灰の如き冷き理には吾既	中に感覺え、	就り難く、浪逆の浦の浦波枕に寄するおと胸	見たる萋野に猶心まだ彷徨へる心地のして夢
----------------------	----------	----------------------	------------------	----------------------	----------------------	--------	----------------------	----------------------

の	児	悲	懐	相	漿	祖	屈	み
三	の	く	へ	識	は	と	子	は
時	の	昔	ば	る	余	贅	の	新
の	曠	愆	今	事	既	せ	言	に
時	野	し	の	の	に	し	ひ	相
計	の	と	寂	甘	嘗	な	初	知
を	末	潮	寥	き	め	る	め	れ
聞	に	田	く	漿	盡	に	て	る
け	行	は	昔	は	せ	生	五	よ
り	徨	眠	の	味	り	き	世	り
。	へ	ら	面	ふ	、	な	真	樂
	る	れ	白	べ	然	か	も	は
	如	ぬ	く	き	も	ら	是	無
	く	ま	、	。	何	々	れ	し
	、	、	考		れ	別	千	と
	煩	唯	ふ		何	離	古	は
	悶	是	れ		の	し	情	は
	の	れ	、		時	苦	語	、
	床	は	懐		か	き	の	往
	に	今	よ		新	、	濃	昔
	夜	の			に			

鳳

悲	真	か	風	時	な	往	故	弱
み	夏	花	に	も	は	昔	に	の
は	も	咲	も	世	風	の	愚	千
生	雪	け	吹	は	に	吾	なる	里
な	白	る	か	春	吹	が	や	の
から	き	春	れ	と	か	山	。	途
別	冬	も	ぬ	の	れ	に		に
離	の	霜	現	み	夏	入		旅
る	野	置	今	思	は	ッ		立
、	の	け	の	ひ	渴	て		て
よ	如	る	吾	し	し	は		猶
り	何	秋	が	身	冬	雨		惜
悲	に	の	、	の	は	に		心
き	寂	如	感	。	凍	濡		ざ
は	寥	く	慨	雨	え	れ		る
莫	き	、	中	に	し	、		事
く	よ	緑	に	あ	も	何		の
、	。	繁	れ	れ	、	に		何
樂		れ	ば	ず	父	立		が

悔

短夜の明け近きに、何の影を吠申るにや犬は
 遠くワウくと叫び、今宵は水無月十七夜、
 滴るばかりの月は傾き、西の窓には婆娑と樹
 木の影をやどして、有明の燈火も光弱く、潮
 田は思屈して夢も現ともなく恍惚とをれる
 時、氣に乗る如く足軽く悄然として枕頭に立
 てるものあり、唯見る巡禮姿の十一二なる女
 の子の、淺黄色なる手甲のみは鮮明に、旅に
 憔悴し身装淋しく、其傍の如何で忘らるべ
 ず、

露ちやん
 と、癒し千人の名を呼んでかはと跳ね起きた
 り、

オイ、奈何した
 と、愕然として目覺めたる真島に呼びかけら
 れ、潮田は吾に復りて身邊を眊せども、幽明
 道異なれる甲斐なさには、追ふに跡なく呼ぶ
 に應なく、幻の身は消えて再び見えす。

敷居越し
に手まつれば

下婢の知らせに應じて静肅に入り来れるは年
 齡の頃六十近き分別顔の親仁なり、
 御免下さり、御客様方には實に序簾相
 様で相濟みません、序呼び下さりませしたの
 は何か御用で序座いまするか
 どうぞ此方へ
 潮田は丁寧に座を譲りて、仕
 や、少し序聞き致度以事があるので態々
 序呼びした譯だが、あんまり古以事で序志
 水かといれませんが、丁度現今より二十年

以前、若しや此宿に、左様、當時四十歳位
 でもあつたか男親と、十一歳か二位の娘と
 の六部親子が泊つて、そして其娘の子が病
 氣で死んだといふ様な事がありますんでし
 たか、随分古以話で序忘れかと思はれませ
 んが、能く考へて見て下さりませ、
 昨夜の幻影におとひ合はすれば別る、時
 病氣にてありしといへ、若しやと思はる節
 のあれは潮田は此く聞けるなり、亭主は首も
 傾けず

可いやありまた、成程言はれて見れば最も
 二十年、夏の末と暮方くればで市座じざまましたが、
 鹿島参詣かしままきの六部むく親子おやこ、仰有おつちやる通とほり男親おとこおやに娘むすめ
 の子こ、愍然あはれに貴方様あなたさま、其娘そのむすめの子こは霍亂かくらんでい
 てな、賣薬ばいやくなども吞のませましたが、吐はくや
 ら瀉くだすやら大層たいそう苦くるしみまして、側はたで見みる目め
 も可哀相あはれで市座じざにました、其そのまた親おやの心配こころばい
 といふものは普通ひふふでなく、後あとでは村むらの醫者いしや
 にも診みせましたが、ごうせ田舎ゐなかの藪醫者やぶいしやの
 手てにおへずに死おにましたが、いや其親そのおやの落おち
 した。
 膳おとしといふものは笑止せうしなほど氣きの毒どくでありま
 した。
 それに其娘そのむすめの子こは何なにか弟おとうとにでも紛離はぐれまました
 のか、苦くるみながらも始終しじう誰だれさんは未まだ来こな
 いか、誰だれさんは未まだ見みえないかと大層たいそう慥こゝろ
 がツて居をりましたが、親おやはまた他人たにんを尋ねた
 に遣やつたから直ちかに来くるからと慰なぐさめても、何なに
 時ときまでも見みえないので、仕舞しまには阿父おとうさん様さま迎むか
 へに行いつて来きてお呉くれと言いつて、自分おれの病びやう
 氣きも忘わすれて泣なくので市座じざりました。
 何なにしる

可いやありまた、成程言はれて見れば最も
 二十年、夏の末と暮方くればで市座じざまましたが、
 鹿島参詣かしままきの六部むく親子おやこ、仰有おつちやる通とほり男親おとこおやに娘むすめ
 の子こ、愍然あはれに貴方様あなたさま、其娘そのむすめの子こは霍亂かくらんでい
 てな、賣薬ばいやくなども吞のませましたが、吐はくや
 ら瀉くだすやら大層たいそう苦くるしみまして、側はたで見みる目め
 も可哀相あはれで市座じざにました、其そのまた親おやの心配こころばい
 といふものは普通ひふふでなく、後あとでは村むらの醫者いしや
 にも診みせましたが、ごうせ田舎ゐなかの藪醫者やぶいしやの
 手てにおへずに死おにましたが、いや其親そのおやの落おち
 した。
 膳おとしといふものは笑止せうしなほど氣きの毒どくでありま
 した。
 それに其娘そのむすめの子こは何なにか弟おとうとにでも紛離はぐれまました
 のか、苦くるみながらも始終しじう誰だれさんは未まだ来こな
 いか、誰だれさんは未まだ見みえないかと大層たいそう慥こゝろ
 がツて居をりましたが、親おやはまた他人たにんを尋ねた
 に遣やつたから直ちかに来くるからと慰なぐさめても、何なに
 時ときまでも見みえないので、仕舞しまには阿父おとうさん様さま迎むか
 へに行いつて来きてお呉くれと言いつて、自分おれの病びやう
 氣きも忘わすれて泣なくので市座じざりました。
 何なにしる

様方の序尋問なさるのほそれて市座いま
 たか、姓名は忘れましたか國は確か出羽の
 秋田といひました、其時の事は實に愍然な
 状態で市座いましたので能く記憶て居りま
 する
 潮田は今此の亭主の物語に、六部の故郷の出
 羽の秋田とのみは識りたれども、未だ其行方
 も姓名も知るに由なく、
 〆
 首を擧げ得ず涙を飲んで漸く聞けば、

霍亂といふ大病で市座いましたから、親も
 手を離して其剝離た者を尋ねに出る譯にも
 参らずに枕頭に附いて看病して居りました
 が、遂々誰さんは、誰さんはと、いや何とか
 言ひました、老人は記憶が悪く忘れました
 が、其名を呼びながら、左様死にました時は
 次の朝其夜の白々明けで市座ましたらうか
 、蚊帳の中に親の膝を枕に真白な死顔を覘
 きました、實に姿色の佳い娘、親は思案の
 首を垂れて扼腕して居りましたかな、貴方

何^{なん}でも癒^{なほ}ると言^いひ觸^ふらしたもので
 參^{まゐ}詣^りすると痘^{はうさ}瘡^さや麻^あ疹^{しん}が輕^{かろ}く、子^こ供^{ども}の病^び氣^き
 にしたものでありません、仕^し舞^まには其^{その}墓^{はか}に
 と捧^たげてあつて、決^けして子^こ供^{ども}等^らなんどの徒^{いたづ}
 といふ事^{こと}もなく節^せ々^つの花^{はな}が必^{かな}らず其^{その}墓^{はか}に整^{ちやん}然^{ぜん}
 なりました。それ^{それ}に妙^{めづ}な事^{こと}には誰^{だれ}が献^あげ
 りまして暮^{くれ}方^{がた}などは其^{その}墓^{はか}の近^{ちか}邊^まを通^{とほ}らなく
 鼓^ねの聲^{こゑ}が聞^きえると以^もつて、村^{むら}の者^{もの}は淋^{さい}しが
 そして貴^{あな}方^{なた}様^{さま}、其^{その}後^ご七^{しち}八^{はち}年^{ねん}も經^た過^ちま
 ら、不^ふ思^し議^ぎの事^{こと}には其^{その}娘^{むすめ}の子^この墓^{はか}で毎^{まい}夜^{ばん}
 鼓^ねの聲^{こゑ}が聞^きえると以^もつて、村^{むら}の者^{もの}は淋^{さい}しが
 りまして暮^{くれ}方^{がた}などは其^{その}墓^{はか}の近^{ちか}邊^まを通^{とほ}らなく
 なりました。それ^{それ}に妙^{めづ}な事^{こと}には誰^{だれ}が献^あげ
 といふ事^{こと}もなく節^せ々^つの花^{はな}が必^{かな}らず其^{その}墓^{はか}に整^{ちやん}然^{ぜん}
 と捧^たげてあつて、決^けして子^こ供^{ども}等^らなんどの徒^{いたづ}
 にしたものでありません、仕^し舞^まには其^{その}墓^{はか}に
 參^{まゐ}詣^りすると痘^{はうさ}瘡^さや麻^あ疹^{しん}が輕^{かろ}く、子^こ供^{ども}の病^び氣^き
 は何^{なん}でも癒^{なほ}ると言^いひ觸^ふらしたもので

骨^{ほね}ばかりも國^{くに}元^{もと}に持^もつて歸^{かへ}り度^たいと申^ま刺^さま
 したか、何^{なん}しる此^{この}邊^{へん}は當^{その}時^{とき}火^{くわ}葬^{さい}場^ばといふの
 は序^{しよ}庭^{てい}以^もませんで、仕^し方^{かた}なく此^{この}の村^{むら}の村^{むら}
 端^{はづれ}の荒^あ地^ちに埋^{まい}葬^{さい}しよして、其^{その}後^ご旬^{じゆん}日^{にち}ばかり
 此^{この}宿^{しゆく}に逗^ど遼^{りやう}して居^ゐりましたか、娘^{むすめ}の身^みに付^つ
 ける物^{もの}とては手^てを觸^ふれた形^{かたち}見^みだと申^まして撞^つ
 木^{もく}一^{ひと}個^こを持^もちまして、鉦^{かね}敲^{たた}く力^{ちから}も無^ない様^{やう}に
 此^{この}地^ちを立^たちましたか、其^{その}後^ご奈^な何^{ごう}なりました
 か、一^{いつ}向^{かう}に消^{しょう}息^{そく}聞^ききませせん。

有縁わたりの者ものであるが、此地ちちに來きた便次ついでに其墓そのはか
 參詣まゐりも致いたしたく、また供養くやうの爲ために施主せしゅと成な
 ツて、此邊このへんの和尚をんしやう様さん何宗なにむねでも構かまはなないから
 可及なるべく的めい名僧めいそうの聞きこえある道力だうりき健固げんこな導師だうしを
 一人ひとり頼たのんで買もらひ度たいものだが、
 と言いへば、親仁おやぢは困却こんてつの縣てんに天窓あたまを撫なで、
 此邊このへんで名僧めいそうと言いつて貴方あなた様さま、近頃このごろは何處どこの
 坊ぼくさんでもはや、鹽鮭しほざけの隠かくし喰くひなら未まだ
 一もで痔産ぢざんります、百姓ひやくしやうでも實體じつたいのものは
 四足そくそく二足そくは喰くはなないと言いつて居をりますのに

ます、今時いまとき徳磨とくまふとを御若おわかい方かたに申まします
 と笑わらげれますが、時々ときどき不思議ふしぎな事ことが私わたくしのと
 ころでも痔産ぢざんいましたので、何かなにの縁えんがあ
 ればこそ多數おほせの客きやくのなかでも一人ひとりばかり私わたくし
 の家内うちで死しんだものと、自家うちの佛ほとけの樣やうに思おもひ
 まして盆ぼんなどには必ずかならず墓參はかまゐり詣まりする事ことに致いた
 て居をります、
 と、語かたり了おほれば、默然もくねんと聞き居をる潮田うしほたは首くびを
 擧あげ、
 聞きけばそれそれに相違さうゐない、私わたくしは少すこし其六部そのむくぶの

法衣着た儘で割烹店に上ッて牛肉だ軍鶏
 だ仕舞には其処の私窩子のやうな女中に巫
 山戯るといふ心はや、こんでもな心世間
 に薬にしたくも名僧の道力健固のといふ者
 は居りません、私共始め法用を教しする
 にも親類の者にも心経や観音經ぐらゐ暗誦
 にするものも序座りますれば、何も那樣和
 尚さん達を呼ぶにも當りませんが、そぶが
 何様も習慣で、天窓剃ッて法衣着た御仁が
 居らッ志やらないと、死んだ佛には何様で

も親戚の者の前を氣兼まッて、ほんの唯義
 理一通に呼ぶので御座ります、それで貴方
 様方、達て道力健固の者と仰志やるなら、
 檀家は持ちませんが此処に十年ばかり以前
 から行脚の和尚様で、此地の景色が好いか
 らと申しまして、村端の湖端に庵を繕置ま
 して行ひ澄まして居ります、それは
 殊勝にも牝猫一疋置くでもな心、此処の川
 魚の不絶の地に來て蝦一疋喰ふでもな心、
 朝から晩まで讀經三昧、稀には息洲の方か

ら遠く矢田部、東下邊まで逍遙なさるばか
 り、見るからに頼もしく尊やうな和尚様
 で御座ります、譯を話して能く依頼ました
 なら、何も佛の為で御座りますもの来て呉
 れな心事はあります、喜んで来て呉れ
 ませう、
 親仁は氣永に物語れり。
 其れでは一ツ御亭主さんを煩勞し度いが、
 其和尚様を一旦此宿まで市呼び申して、そ
 れから一緒に墓まで行ッて供養して買度

以ものだが、
 元以宜し、市座います、譯は市座りません
 行ッて参りませう、

邂逅

其日午近くして亭主に供をよ来れり老僧は、
 年齢のほど耳順にして身には麻の法衣を着け
 眼凹み肉瘦せて、唯是れ三冬暖氣なく、寒
 崑に倚る枯木の如き容態なるも、眉秀で準隆
 く、頭に葛巾を戴かば夜来八萬四千の偈と曰
 一昔時の坡翁が態度も斯くやと、其善知識
 の程も推察られたり。
 潮田真島の兩人は慇懃に請ど迎へて、改めて
 其譯を語り今日の佛の供養を頼めば、老僧は

の時着たる物ならんかとまで想像しても、余
 りの思ひがけなき此場に何の言葉もなく、老
 僧は徐に數珠を爪繰りながら、
 實は先刻亭主の話を聞いて、旅に死んだ巡
 禮の娘の供養を頼んだ仁は甚麼御方かと聞
 けば、宿帳に依れば御二人とも三十歳前後
 、御國は羽前に岩代、御一方の名は潮田保
 と聞きた時は、世捨人にも似合はず飛立つ
 ほど嬉しかつた、野僧は再び此の地に來る
 途中、貴方の郷里を通つて保さんといふ名

眉宇の間に稍歎息の色を現はして、
 以や其事は此宿の亭主に詳しく聞いて、思
 ふ仔細があつて庵を出る時用意して來たが
 案に違はず、マア嚴美に御成人なすつた保
 さんは是を御覽なさい、
 と風呂敷より取り出して、潮田の前に置ける
 は是一個小兒の冬衣なり。
 潮田は保とまで吾が名を呼ばれて、愕然と
 て老僧の顔を瞻り、此の老僧の或は其時の六
 部の親にてありしか、此の衣服は其當時家出

廿

便たよりに姓せいを聞きいて来きたが、下ちやうど度い現ま今まより二ふ
 十たむかし年し、野わたくし僧しでさへ夢ゆめのやう、貴あなた方たは七なな歳つか
 八やっつ歳つの小こ児どもでああつたから、賢かこい御お子こああつた
 けれども大たい抵ていは序お忘わすれで序お出いだらう、野あぐし僧し
 は貴あなた方たの幼あさな顔がほを能ぞく知しつて居をるが貴あなた方たは野あぐし
 僧しの顔かほは序お忘わすれでせう、野わたくし僧しは露つゆの親おやで昔その
 時ときの六む部ぶでああつたが、野わたくし僧しの昔むかしの俵はつは少すこし
 も無ないと見みえて、此この宿やどの序ご亭てい主ぬも六む部ぶのと
 き別わかれて其その後あと十じゅう八はち年ねん経へんつてから再ふたび此この地ちに
 行あん脚ぎや坊ぼう主ずに成なつて来きた時とき、尤もつとも頭かみ髪りは剃おろ
 て来きたものの悉すつかり皆わすれ居をつたくらゐ、娘むすめ
 の病びやう氣きでは此この处ところの宿やどには一ひと方たうならぬ世せ話わに
 成なつたが其その時とき既すでに志しは致いたしたり、名な乘のり合あつ
 ては又また親あやしく成なつて、年とし寄より同どう志しの度たび々あ庵あんに
 茶ちや話わしにでも来きられては修しゆ業げふの邪よ魔まと思おもつ
 たから其その儘ままにして今いま年で下ちやうど度い十じゅう三さん年ねん間かん娘むすめの
 墓はか守もりして居をつたが、保たもつさん貴あなた方たは最も少すこしで
 も憎にく氣きに序お生うれなすつたら、此この处ところまで序お連つ
 れするでは無なかつたに、余あんなり可か愛はい序お朋とも友だちが
 露つゆもまた貴あなた方たに逢あつてから善よい序お朋とも友だちが
 出で

便たよりに姓せいを聞きいて来きたが、下ちやうど度い現ま今まより二ふ
 十たむかし年し、野わたくし僧しでさへ夢ゆめのやう、貴あなた方たは七なな歳つか
 八やっつ歳つの小こ児どもでああつたから、賢かこい御お子こああつた
 けれども大たい抵ていは序お忘わすれで序お出いだらう、野あぐし僧し
 は貴あなた方たの幼あさな顔がほを能ぞく知しつて居をるが貴あなた方たは野あぐし
 僧しの顔かほは序お忘わすれでせう、野わたくし僧しは露つゆの親おやで昔その
 時ときの六む部ぶでああつたが、野わたくし僧しの昔むかしの俵はつは少すこし
 も無ないと見みえて、此この宿やどの序ご亭てい主ぬも六む部ぶのと
 き別わかれて其その後あと十じゅう八はち年ねん経へんつてから再ふたび此この地ちに
 行あん脚ぎや坊ぼう主ずに成なつて来きた時とき、尤もつとも頭かみ髪りは剃おろ
 て来きたものの悉すつかり皆わすれ居をつたくらゐ、娘むすめ
 の病びやう氣きでは此この处ところの宿やどには一ひと方たうならぬ世せ話わに
 成なつたが其その時とき既すでに志しは致いたしたり、名な乘のり合あつ
 ては又また親あやしく成なつて、年とし寄より同どう志しの度たび々あ庵あんに
 茶ちや話わしにでも来きられては修しゆ業げふの邪よ魔まと思おもつ
 たから其その儘ままにして今いま年で下ちやうど度い十じゅう三さん年ねん間かん娘むすめの
 墓はか守もりして居をつたが、保たもつさん貴あなた方たは最も少すこしで
 も憎にく氣きに序お生うれなすつたら、此この处ところまで序お連つ
 れするでは無なかつたに、余あんなり可か愛はい序お朋とも友だちが
 露つゆもまた貴あなた方たに逢あつてから善よい序お朋とも友だちが
 出で

小娘彼の露があつたのでそれもならず、
 俗躰のまゝ、六十六部となり廻國しやうと思
 ツて故國を出だが、秋田より酒田、庄内念
 珠が関を越えて北陸道より西京に出、山陰
 道より九州に渡り、戻りには四國より山陽
 道を経、東海道より東山道、仙臺、南部、
 津輕から再び秋田に歸らうと思つたけれど、
 貴方の國の立石寺から龜岡の文珠堂に參詣
 したく、途を山道にとつて下度貴方の郷に
 来ると、可哀想に小兒一人で恐山に居る阿

来た氣で、道の疲勞も忘れて行くので其間を
 別けるのに忍びなく、遂々此地までお連れ
 申したのには悪かつた、お姉様もあつた様
 でした。が後で甚麽にか心配なすつた事だら
 う、今日は又奈何して此地に露の墓が在る
 といふ事が判りになりましたか、それは
 後で聞くとして、序詫び旁々當時の事を委
 細序話しするが、實は野僧は秋田の者で妻
 に死別てから、少しく心懸けがあつたので
 直ぐにも法躰にならうかと思つたけれど、

見^み安^あを^を 房^は上^かの^の 總^すの^の

善光寺、越中の立山、北陸道を西京に出
 國に渡り、九州までもと思つたが、余り旅
 が永くなつたので、早く貴方をお姉さんに返
 さうと思つて九州には渡らずに、歸途は東
 海道を此地まで来ると露が大痛、野僧一人
 鹿島の原より町に引返して薬を買つて来る
 と待たして置いた貴方を見えなくした、露
 が一人野に俯伏に倒れて居つて、保ちやん
 は一人で先に往つて終末つたから早く追
 けて泣きながらいふ、野僧は病氣の娘を

母様に會ひに行くと言つて家を出たのに遇
 つた、その可憐の風と言つたり野僧は其時
 思はず涙が零れた、それで余りに可愛かつ
 たもんだから親も無以子と思つて、お姉さ
 んには悪うかつたが唯心配だけおはさせま
 と無名の手紙で詫を置いて置いて、其頃専ら
 風説のあつた事だか、ごうせ恐山に行つて
 も死んだ者に逢はれやう氣遣が無以から勝
 手に自分の行く方に、會津から相馬、勿来
 を經て水戸から日光、碓氷峠を越えて信州

十

遠のならば、此邊こゝへんの役場やくばが警察けいさつで貴方あなたの守袋まもりぶくろで
 も見みて、國元くにもとに照會せうかいしたものと見みえる、そ
 れでは無事ぶじに送り返かへされる事ことであらう、そ
 れに勾引かどばいといふ一語ひとことに成程なるほどさう言いはれても
 言譯いひあけがなく、爰こゝは野僧あたくしの出でる処ところでは無ないと
 思おもつたから、それなりに心こゝろを鬼おににして知しら
 ず顔かほにして居をつたが、其時そのときは貴方あなたは途中とちうで
 買かつた單物ひとものを着きて居をつたから、此こゝは野僧あたくし
 の手てに残のこつて今いままで可愛かちいい子の形かたち見みと思おもつ
 て藏たまつて置おいたのだが、貴方あなたは最もう衣服きものの

負おんつて急いそいで大船津おほぶねまで来て見みても行方ゆくへが
 知しれず、其そのうち日ひが暮くれて一先ひとまづ此宿こゝ
 に泊とまつて再び出でて尋ねたづねやうと思おもつても、何なん
 分ぶんにも露つゆの肴かひやく病びやうで瞬時しゅんじも手てが放はなされず、露つゆ
 は自分おのれの病びやう苦くを忘わすれて保たちやんは保たちやん
 はといふけれども、霍亂くわくらんといふ大病たいびやう野僧あたくしも
 途方とほうに暮くれました、露つゆが死しんでからだが、
 此邊こゝへんの風評ふうへいに出羽でほの者もので七歳ななつばかりの児こが
 他人ひとに勾引かどばいされて此処こゝまで来きたのを傳馬でんまで
 送おくるといふ事ことが聞きえたから、確たしかに貴方あなたに相ま

實じつに

前まへに置おいて其その儘まの小こ兒どもにや返かへりけん唯ただ一言ひとこと
 黙もくねん然ぜんとして聞きき了はれたる潮うしほ田たは、幼えう時ときの衣き服ふくを
 小こ、永なが々々と物もの語がれば、半なかば悲かなしく半なかば嬉うれしく
 不ふ思議ぎにまた今日けふは下ちやうど度ど娘むすめの命いのち日ひだ
 今日けふ此こゝ宿しゆくで逢あはうとは夢ゆめにも思おもはなかつた
 て、再ふたび此こゝ地ちに來きて居をつたのだが、貴あなた方に
 の方はうに出でて、須す賀か川がはから東とう京きやうまで汽き車やに乗のつ
 るとの事こと、引ひ返かへさずに直すぐと米よね澤ざはから福ふく島しま
 を態あざ々々貴あなた方の郷さとを通とほつて聞きいて見みたが、生あい
 憎にくその時ときは貴あなた方も成せい長ちやうして山やま形がたの中ちゆう學がくに居を
 るとの事こと、引ひ返かへさずに直すぐと米よね澤ざはから福ふく島しま
 の方はうに出でて、須す賀か川がはから東とう京きやうまで汽き車やに乗のつ
 て、再ふたび此こゝ地ちに來きて居をつたのだが、貴あなた方に
 今日けふ此こゝ宿しゆくで逢あはうとは夢ゆめにも思おもはなかつた
 不ふ思議ぎにまた今日けふは下ちやうど度ど娘むすめの命いのち日ひだ
 小こ、永なが々々と物もの語がれば、半なかば悲かなしく半なかば嬉うれしく
 黙もくねん然ぜんとして聞きき了はれたる潮うしほ田たは、幼えう時ときの衣き服ふくを
 前まへに置おいて其その儘まの小こ兒どもにや返かへりけん唯ただ一言ひとこと

模も樣やうなども忘あれたでせう、それから野あ僧くしは
 露つるには死し別わかれ、貴あなた方には生い別わかれ、俄にはに心こゝろ寂さび寞しく
 一人ひとり故こ國くにに帰かへつたが、何どう様やうも娘むすめの墓はか地ちを荒あ
 らすのが心こゝろ中ちゆうに忍しのびず、また此こゝ地ちの景けい色しきに
 も惚ほれ、それそれに故こ郷きやうに居をつては知ち己きの者ものに
 修しゆ業ぎやうの邪ま魔まをさされるので、どうせ他た郷きやうに奔は
 るなら此こゝ地ちと思おもひ、國くに元もとの少すこしばかりの財ざい
 産さんを片かた付つけ、再ふたび此こゝ地ちに來きる途と中ちゆう、貴あなた方は
 甚じん廢なになつて居をるかと思おもひ、修しゆ業ぎやうの身みには似に氣げな
 くも未み練れんが殘のこつて、山やま形がたから仙せん臺だいに出でるの
 模も樣やうなども忘あれたでせう、それから野あ僧くしは
 露つるには死し別わかれ、貴あなた方には生い別わかれ、俄にはに心こゝろ寂さび寞しく
 一人ひとり故こ國くにに帰かへつたが、何どう様やうも娘むすめの墓はか地ちを荒あ
 らすのが心こゝろ中ちゆうに忍しのびず、また此こゝ地ちの景けい色しきに
 も惚ほれ、それそれに故こ郷きやうに居をつては知ち己きの者ものに
 修しゆ業ぎやうの邪ま魔まをさされるので、どうせ他た郷きやうに奔は
 るなら此こゝ地ちと思おもひ、國くに元もとの少すこしばかりの財ざい
 産さんを片かた付つけ、再ふたび此こゝ地ちに來きる途と中ちゆう、貴あなた方は
 甚じん廢なになつて居をるかと思おもひ、修しゆ業ぎやうの身みには似に氣げな
 くも未み練れんが殘のこつて、山やま形がたから仙せん臺だいに出でるの

阿父様

と呼んで庵主の前に泣き伏したり。

老僧の物語に當時の事の一切明かに判れば、

真島も亭主も其奇遇におどろき、潮田はまた

涙を拂って、昨夜の幻影より若しやと思つて

亭主に梗概を聞きし事より話し合ひ、兎に角

死き者の墓参をすべく、亭主も真島も共に、

四人連れ立ち宿をば立ち出でたり。

その墓といへるに來て見れば、紀念に植

る名も知らぬ樹の、緑に交じる疲葉も風に戦

ぎ、青塚苔深く、旅魂幽霊いま何処にか彷徨

らんと思はれて四人は愁然たるのみ。

中にも潮田は保ちやんと今にも地の底より呼

ばる、心地のして、潜然と涙は墓を濡したり。

此の佛に何で己が讀經が供養になるものか

、それより呼吸を引きとるまで保ちやんは

保ちやんはと戀しがツて居つたものを、保

さん貴方の口より一遍の稱名が何よりの供

養だと言つて、庵主も有撃以まさらに墨染の袖を

111

濡したり。春秋二十、生ける者と死せる者と出明道を異
 にして、戀にもあらぬ子供同志は爰に再び解
 逅せり。かくて亭主は先に己が宿に歸り、潮田と真島
 は庵主に供はれて墓より五六丁隔てし其庵に
 行き見れば、前には浪逆の浦波千里一碧拭ふ
 が如く、後は竹林緑濃に、見渡せば遠山紫に
 前川白帆飛ぶ。されば赤鯉躍つて子英去り、
 白鷗飛んで玉喬来る群仙遊ぶ地に來つて、真
 島は五六日前寫生したる処なるをと思へば潮
 田も、真島の宿にて見たる一幅の畫と何れか
 真、何れか偽と思ひ惑ふまでに真島の技の神
 に入れたるに驚ぎ、互に心中に秘めて草庵に入
 れば、表の柱に綱代の笠、經机には二三の經
 卷陶器の香爐のみなる枯淡の生涯奥ゆかしく
 床柱には小さき撞木の掛りたる死き者の形
 見と思はれて哀なり。潮田は此度業卒えて都に一戸を構ふるにも
 妙は既に他に嫁して妻は未だあらざ一人身

濡したり。春秋二十、生ける者と死せる者と出明道を異
 にして、戀にもあらぬ子供同志は爰に再び解
 逅せり。かくて亭主は先に己が宿に歸り、潮田と真島
 は庵主に供はれて墓より五六丁隔てし其庵に
 行き見れば、前には浪逆の浦波千里一碧拭ふ
 が如く、後は竹林緑濃に、見渡せば遠山紫に
 前川白帆飛ぶ。されば赤鯉躍つて子英去り、
 白鷗飛んで玉喬来る群仙遊ぶ地に來つて、真

